

指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書（4）

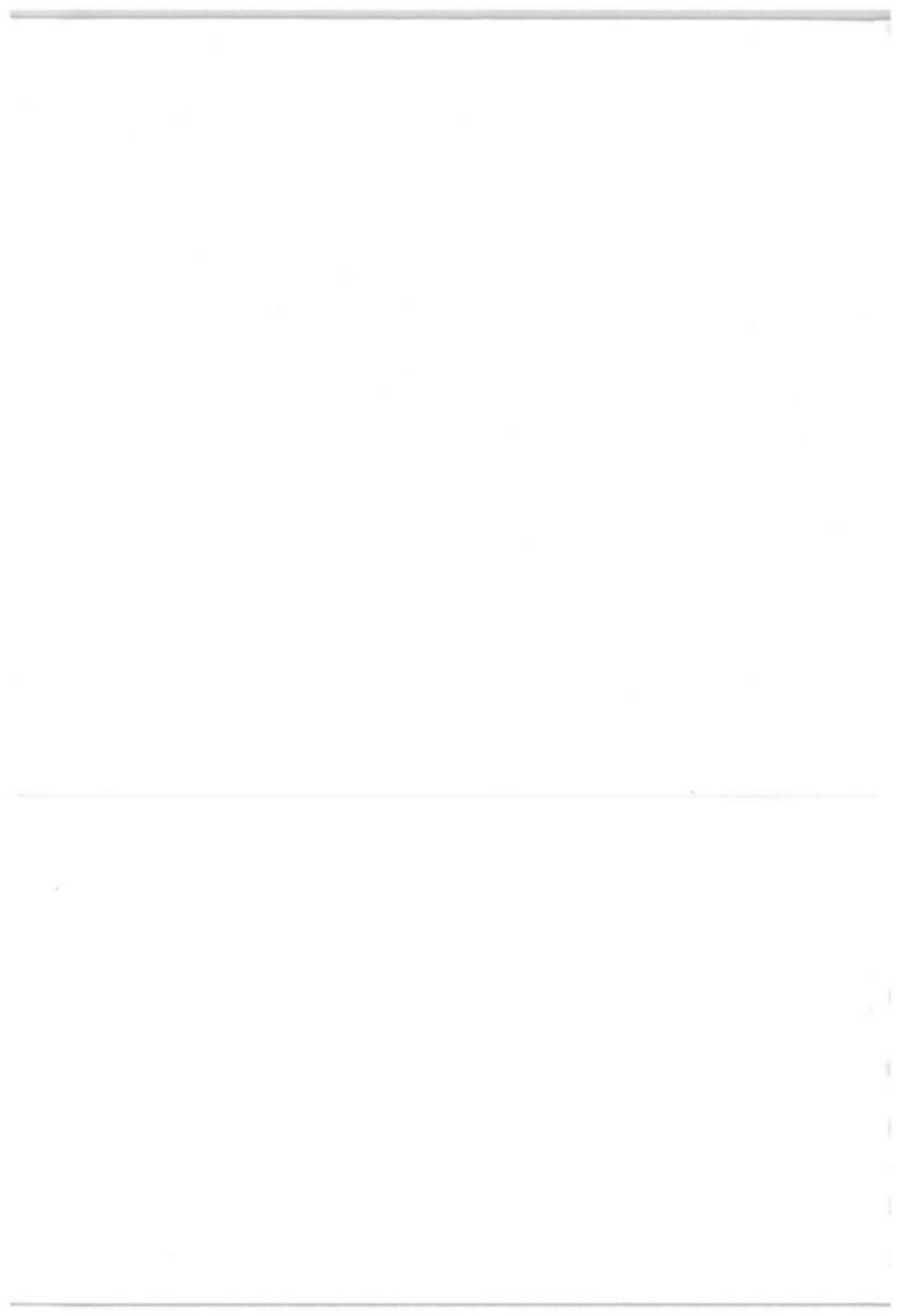
県営畑地総合土地改良事業鳥山工区
に伴う埋蔵文化財確認調査報告書

鳥 山 調 査 区

西 原 道 畑 遺 跡
西 原 迫 遺 跡
早 馬 迫 遺 跡
そ の 他

1980年3月

鹿児島県指宿市教育委員会











序 文

新西方鳥山地区は今和泉渡瀬遺跡に隣接する周知の埋蔵文化財包蔵地であります。

この遺跡の調査は県宮南薩摩地帯総合土地改良事業実施に伴い「鳥山遺跡発掘調査事業」として事業費700万円（文化庁補助350万円、県補助175万円、市費175万円）で実施したものであり、その調査の概要を報告書としてまとめました。

この調査結果が土地改良事業実施にあたって、遺跡保存のために適切に活用されるよう念願いたします。

この調査にあたっては、文化庁の文化財調査官の指導を受け、また、県文化課からは、調査員を派遣して発掘調査を直接担当していただきました。

ここに 肪寒の時期に大変なご尽力くださった調査員をはじめ、指導者、作業協力者及び協力いただいた土地所有者の方々に厚くお礼申しあげます。

本市においては、埋蔵文化財包含地が各地に散在し、このような土地改良事業実施に伴う遺跡調査は更に継続しなければならない事情にありますので、今後ともご協力くださるようお願いいたします。

昭和55年3月31日

指宿市教育委員会

教育長 貳 方 忠 雄

例　　言

1. この報告書は指宿市教育委員会が国庫補助を得て実施した昭和54年度埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は県営畠地帯総合土地改良事業島山工区に伴う事前調査として実施した。
3. 発掘調査責任者 指宿市教育委員会 教育長 貳方忠雄
鹿児島県教育庁文化課 主事 弥栄久志
調査員 中島哲郎
〃 井ノ上秀文
4. 本書の執筆は次のとおりである。

第Ⅰ章 1・2節	中島哲郎
第Ⅱ章 1・2節	〃
〃 3節	成尾英仁
第Ⅲ章 1~35トレンチ	中島哲郎
8 "	井ノ上秀文
23 "	弥栄久志
第Ⅳ章まとめ	弥栄久志
- 実測・図面等の作成は弥栄・中島・井ノ上が中心となり一部は鹿児島県教育庁文化課の埋蔵文化財係が補助した。なお写真撮影は弥栄があたり、本書の編集は中島がおこなった。
- この報告書にあたり、遺物について県文化財審議会委員河口貞徳氏、層位については指宿高校教諭成尾英仁氏に指導助言を得た。
- 本書に用いたレベルの数値はすべて海拔絶対高である。
- 遺物の整理・復元・実測は主として県教育庁文化課収蔵庫の協力を得た。

本 文 目 次

第Ⅰ章 遺跡の環境と周辺遺跡	7
第1節 遺跡の位置と環境	7
第2節 周辺遺跡	9
第Ⅱ章 発掘調査の経過と概要	
第1節 発掘調査の経過	11
第2節 発掘調査の概要	18
第3節 烏山調査区の地質について	21
1. 地形概略	21
2. 層序	21
3. 各層の堆積様式	25
4. 各遺跡との地層対比	26
第Ⅲ章 各トレンチの調査と出土遺物	
第1トレンチ	30
第2トレンチ	30
第3トレンチ	33
第4トレンチ	36
第5トレンチ	36
第6トレンチ	37
第7トレンチ	38
第8トレンチ	47
第9トレンチ	55
第10トレンチ	55
第12トレンチ	55
第13トレンチ	55
第14トレンチ	55
第16トレンチ	56
第18トレンチ	56
第20トレンチ	56
第21トレンチ	57

第22 トレンチ	57
第23 トレンチ	57
第24 トレンチ	65
第25 トレンチ	65
第26 トレンチ	65
第27 トレンチ	65
第28 トレンチ	65
第30 トレンチ	65
第31 トレンチ	66
第32 トレンチ	66
第33 トレンチ	66
第34 トレンチ	66
第35 トレンチ	66
第IV章　まとめ	75

表　　目　　次

第1表　指宿市内の主要遺跡	9
第2表　これまでの経過	12
第3表　トレンチ調査の概要	18

挿　　図　　目　　次

第1図　指宿地方の位置	7
第2図　指宿地方の主要遺跡	8
第3図　調査地域の地形	13
第4図　各トレンチの配置図	19
第5図　鳥山調査区の層位図	23
第6図　鳥山調査区の地質柱状図	24
第7図　指宿市北部台地各遺跡の地層対比	25
第8図　第3・7・8トレンチの断面図	27
第9図　第23トレンチ西、南側断面図	28

第10図	第16・28・34・35トレンチの断面図	29
第11図	第1トレンチの出土遺物	30
第12図	第2トレンチの出土遺物	31
第13図	第3トレンチの出土遺物 ①	32
第14図	第3トレンチの出土遺物 ②	33
第15図	第5トレンチの出土遺物	36
第16図	第6トレンチの出土遺物	37
第17図	第7トレンチの出土遺物 ①	39
第18図	第7トレンチの出土遺物 ②	40
第19図	第7トレンチの出土遺物 ③	41
第20図	第7トレンチの出土遺物 ④	42
第21図	第7トレンチの出土遺物 ⑤	43
第22図	第7トレンチの出土遺物 ⑥	44
第23図	第8トレンチの出土遺物 ①	49
第24図	第8トレンチの出土遺物 ②	50
第25図	第8トレンチの出土遺物 ③	51
第26図	第8トレンチの出土遺物 ④	52
第27図	第8トレンチの出土遺物 ⑤	53
第28図	第8トレンチの出土遺物 ⑥	54
第29図	第12トレンチの出土遺物	55
第30図	第16トレンチの出土遺物	56
第31図	第23トレンチ4層の出土状況	58
第32図	第23トレンチの出土遺物 ①	59
第33図	第23トレンチの出土遺物 ②	60
第34図	第23トレンチの出土遺物 ③	61
第35図	第23トレンチの出土遺物 ④	62
第36図	第23トレンチの出土遺物 ⑤	63
第37図	第35トレンチの出土遺物 ①	70
第38図	第35トレンチの出土遺物 ②	71
第39図	第35トレンチの出土遺物 ③	72
第40図	第35トレンチの出土遺物 ④	73
第41図	第35トレンチの出土遺物 ⑤	74

図 版 目 次

図版1	鳥山調査区西側、調査風景	79
図版2	第7トレンチ西側断面、第10トレンチ北側断面	80
図版3	第3トレンチ出土状況、第8トレンチ出土状況	81
図版4	第23トレンチ出土状況、第3トレンチ出土状況	82
図版5	第7トレンチ出土状況、第8トレンチ出土状況	83
図版6	第8トレンチ出土状況	84
図版7	第2トレンチ出土遺物	85
図版8	第3トレンチ出土遺物、第5トレンチ出土遺物	86
図版9	第6トレンチ出土遺物、第7トレンチ出土遺物	87
図版10	第7トレンチ出土遺物	88
図版11	第7トレンチ出土遺物	89
図版12	第7トレンチ出土遺物	90
図版13	第7トレンチ出土遺物、第8トレンチ出土遺物	91
図版14	第8トレンチ出土遺物	92
図版15	第8トレンチ出土遺物	93
図版16	第8トレンチ出土遺物、第16トレンチ出土遺物	94
図版17	第23トレンチ出土遺物	95
図版18	第23トレンチ出土遺物	96
図版19	第23トレンチ出土遺物	97
図版20	第35トレンチ出土遺物	98
図版21	第35トレンチ出土遺物	99
図版22	第35トレンチ出土遺物	100

第1章 遺跡の環境と周辺遺跡

第1節 遺跡の位置と環境

指宿市は、薩摩半島南東部に位置している。北は田貫川を境にして喜入町と接し、西は指宿スカイラインの走る標高350m～400m位の山々が連なるところを境して頬娃町と接し、南は池田湖を以って開聞町および、良港として有名な山川町と接している。東は19kmにおよぶ断層海岸線をなし、錦江湾に臨んでいる。

指宿地方は第四紀層を研究する上では、火山地形の宝庫と言える。地形は、山地、平野、丘陵および台地そして、湖沼と大きく4地形に分けられる。これらの地形は、古くは阿多カルデラをはじめとし、池田湖カルデラ、開聞岳噴出物等の直接的地形構成を中心とし、その他の火山噴出物（戸戸火砕流・桜島の噴出物・鬼界カルデラ噴出物等）による堆積で形成している。

これらの火山噴出物は、科学的年代測定で出された資料によりおおまかな年代を知ることができ。これはこの地域の古代史を調べる上で、かかすことのできない資料を提供してくれる。

また、霧島火山帯に含まれるこの地方は、地名が「湯豊宿」に由来すると言われるほど、現在でも温泉の多い地域である。（註1）

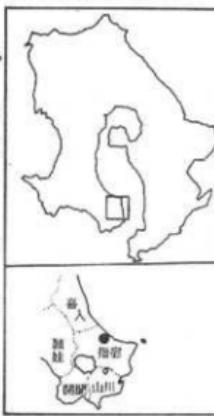
今回調査した鳥山工区は、国鉄指宿枕崎線の薩摩今和泉駅と宮ヶ浜駅とのあいだにあり、国道226号線沿いの十石バス停留所より山手に入る地域である。この地域は、周知遺跡である鳥山遺跡等を隣接するところである。（註2）

調査地域の地形は、ほぼ丘陵および台地、これらを開析する大小の谷により形成している。また、この地域の西側には、錦江湾にそそぐ渡瀬川が流れる。

調査地域の中央部には60m～70m位の丘陵があり、その西側は、ゆるやかな傾斜をなして渡瀬川に続く開析谷になる。この縁辺部は、標高42m位の平坦をなしている。東側はやや急傾斜をなして、十石部落のある、標高42m位の盆地状の地形をなす。調査地域の南東部では標高50m位の小高い丘になる。南側もほぼ東側と同様な地形をなす。北側は、岩本部落に続く急斜崖をなしている。

これらの地域では、鹿児島特産の芋を主にして、大根、園芸作物等を生産している畑地帯である。

調査地域内の小字名は28地名に分れ、隣接部落は十石、鳥山、渡瀬、久保、垂門の各部落である。



第1図 指宿地方の位置



第2図 指宿市内の主要遺跡

第2節 周辺遺跡

指宿地方は、台地および丘陵地が大半をしめている。これらの地形は新生代第四紀洪積世末から沖積世（3万年～千年前）の比較的新しい時代おこなわれた火山活動によって形成されたものである。当時、これらの中心的地域にもかかわらず、各時代の文化層を発見している。古くは小牧3A遺跡、小牧第二工区の遺跡で旧石器の存在が知られ、新しくは橋牟礼川遺跡等に見られる古墳時代の遺跡である。調査地域の北西方約2.6kmに位置する縄文前期の岩本遺跡や山川町との隣接するところにある、縄文後期の大渡遺跡があり、弥生時代でも前期・中期・後期の遺物を出土する遺跡が少なくない。調査地域に隣接するところにも鳥山遺跡、波瀬遺跡が知られている。これらの遺跡は低地の橋牟礼川遺跡やそれに隣接する遺跡を除けば、台地および丘陵部の比較的標高の高い地域で遺跡の存在が知られている。しかしながら標高差による時代分けは一概には言われないが、おおまかには低地に新しい時代の出土物を多く見る。

第1表 指宿市内の主要遺跡

遺跡名	所在地	時代	地形	備考
1 岩本	小牧	縄文前期	台地	前平式
2 小久保	小牧小久保	縄文前・晚期	"	晚期II式
3 露重	小牧露重	旧石器	"	小型のナイフ形石器
4 尾越・堀添	小牧尾越・堀添	旧石器	"	ナイフ形石器・尖頭器
5 中尾	小牧中尾	旧石器	"	小型の石器
6 小牧3A	岩本	縄文前・旧石器	"	吉田式・尖頭器・ナイフ形石器・台形石器
7 鳥山(1)	新西方鳥山		"	土師器・須恵器
8 鳥山(2)	"		"	土師器・須恵器
9 鳥山(3)	"		"	土師器・須恵器
10 細田東後	新西方細田東後		"	土師器・須恵器
11 舟木	新西方舟木追		"	土師器・須恵器
12 鳥山	新西方鳥山		"	石斧・敲石
13 渡瀬	新西方渡瀬	縄文中・後期	"	阿多式・市米式・指宿式
14 幸屋	新西方幸屋		"	土師器・須恵器
15 おばこざこ	西方尾長谷川道7420	弥生後期	"	壺・壺形土器・高环石斧
16 外城市	西方外城市	弥生後期	"	
17 松尾城址	西方6803	中世	"	城址・堀
18 中川	西方中川	弥生後期		住居址

	遺跡名	所 在 地	時 代	地 形	備 考
19	道 上	西方道上	弥生後期	台 地	壺・甕形土器
20	光明寺址	十町迫田	奈 良	"	扁額「円通南仏書」
21	指宿高校校庭	十町236	弥生後期	"	弥生土器
22	矢 石	十町二月田矢石	弥生後期	扁状地	甕形土器
23	清見城址	池田清見城	中 世	山 地	
24	大円寺址	十二町小田大円寺	奈 良	台 地	穴地蔵・千手觀音木像
25	南 迫 田	十町南迫田	弥生後期	"	
26	橋牟礼川遺物 包 含 地	十二町丈六下里橋 牟礼川	縄文中・後・晚 弥生中・後期	扁状地	黒川式・夜臼式・市 来式・阿高式 成川式・人骨・住居址
27	南 丹 波	十二町南丹波	弥生後期	扁状地	壺・甕形土器・凹石
28	摺 ケ 浜	十二町摺ケ浜	弥生後期	"	甕形土器・高坏
29	朝 鮮 ケ 岡	十二町朝鮮ケ浜	弥生後期	台 地	甕形土器
30	大 山 崎	十二町大山崎	縄文後期	台 地	市来式・指宿式
31	大 渡	十二町大渡	縄文後期	"	市来式・指宿式・人骨

註1 成尾英仁 指宿史談（指宿の自然とおいたち）指宿史談会 1979

註2 鹿児島県遺跡地図 鹿児島27 鹿児島県教育委員会 1973

第Ⅱ章 発掘調査の経過と概要

第1節 発掘調査の経過

県営畑地帯総合土地改良事業に伴い、事業区の埋蔵文化財の確認調査を実施し、事業の推進と文化財保護との調和を図るため、昭和50年度より実施してきた。（昭和52年度より指宿市教育委員会が補助事業の主体者となる）

今回の調査も昭和52年度に2回にわたる分布調査を実施し、その結果をふまえ、鹿児島県農地整備課・南薩畑灌事務所・指宿市教育委員会・鹿児島県教育庁文化課とが協議を重ねた結果昭和54年度国・県の補助事業として指宿市教育委員会が主体者となり確認調査を実施した。期間は昭和54年1月29日～昭和55年2月6日まで調査した。その後の遺物の整理作業と報告書の作成は、県文化課調査員に依頼した。

発掘調査の組織

調査主体者 指宿市教育委員会

責任者 教育長 貴方忠雄

事務 廉務課長 秋元俊行

担当 社会教育課長 堀口次雄

文化係長 小牟礼隆恵

主事 大岩本 稔

“ 広森弘子

発掘調査員 鹿児島県教育庁

文化課主事 弥栄久志

“ 調査員 中島哲郎

“ “ 井ノ上秀文

なお、発掘調査にあたり、多くの方々の協力と指導助言に記して感謝申し上げます。

鹿児島県文化課長 山下典夫 同専門員 本藏久三 同埋蔵文化財担当職員

鹿児島県指宿教育事務所

“ 南薩畑灌事務所

指宿市耕地課 同土木課

鹿児島県文化財審議委員 河口貞徳

“ 立指宿高校教諭 成尾英仁

発掘調査作業員

北崎トミエ・高橋シズエ・東ミツエ・川畠ヤスエ・田川ミエ・高橋文子・浜田キヨ・白浜アキエ・常松トミ・高畠薫己江・高野トキエ・高杉ハツ・高峯スミエ・小野フクエ・東川とみ子・東川キミ子・渡瀬きり子・川本のさえ・吉山フジエ・下川床フサエ・中川フヂ子・前原アヤ子・有留ヤエ子・高田キク・井上ミネ・本松ツヤ子・小森イツ子・井上キヨ子・高杉カツ子・瀬戸カズ子・生川ケイ子・井上スエマツ・田川幸子・坂元ミサ子・高野キミ・岸下ミチ子・大浜ヒサ子・高橋百合子・上田ミヨ・水迫フヂエ・増永ノリ子・福永よしえ・福永ゆり子・諸留コト・豊留八重・吉元トシエ・坂元セツ子・千歳スギ・池田和子・徳田ツイマツ・永崎トエ・西村ナミ子・野口シズエ・東ミエ・諸留ミサエ・諸留タケ子・鶴木ナル子・鶴木ヒサエ・鶴木テル子・豊留ニイ・西村タツ子・広森富久美

整理作業員

新つゆ・脇田みつえ・前之園俊子・喜入カツエ・川口セツ子・脇田聰子・中原己美子・相良政子・川口節子・山下治子

第2表 これまでの経過

調査年度	調査地区	発見遺跡	時代・時期	調査者	備考
50年度	新西方地区 (主体者文化課)	岩本遺跡	古墳時代 弥生時代中期 縄文時代晚期	文化課 吉永正史 中村耕治	・設計変更保存 ・整理中
51年度	岩本工区 (主体者文化課) (小牧第I)	第I地点	縄文時代	文化課 出口 浩 長野真一	保存・整理中
		第II地点	古墳時代		文化課で記録保存 (出口浩・西田史)
		第III地点	縄文時代前期		整理中
		第IV地点	縄文時代早期		文部省で古墳保存 (長野真一・中島哲郎)
		第V地点	縄文時代前期		・保存・整理中
		第VI地点	縄文時代前期		" "
52年度	岩本工区 (主体者 指宿市教委)	第VII地点	古墳時代	文化課 長野真一 中島哲郎	・報告あり
		A 地点	古墳時代 弥生時代中期		・A, C遺跡は一部記録保存
		B 地点	旧石器時代 弥生時代		・設計変更・保存
		C 地点	弥生時代 縄文時代晚期 縄文時代前期		・整理中
53年度	小牧工区 (主体者 指宿市教委) (小牧第II)	出水追遺跡	弥生時代 縄文時代 旧石器時代	文化課 弥栄久志 中島哲郎	・報告書あり
		尾越・堀添遺跡	旧石器時代		
		中尾遺跡	旧石器時代		
		露重遺跡	旧石器時代		・54年報告
		小久保遺跡	縄文時代 旧石器時代		
54年度	島山工区 (主体者 指宿市教委)	西原道畑遺跡	縄文時代	文化課 弥栄久志 中島哲郎 井ノ上秀文	・今何報告
		西原追遺跡	弥生・縄文時代		
		早馬追遺跡	弥生時代		



第3図 調査地域の地形

日誌抄

昭和54年11月29日（木）

本日より調査開始。4ヶ所にトレーニングを打つ。器材運搬。

11月30日（金）

17ヶ所トレーニングを設定する。

12月3日（月）

本日より掘り出す。1・8・9トレーニングは8層途中。2・3トレーニングは3層途中。4・5・6・7トレーニングは5層途中。7トレーニングの4層に成川式土器、5層に縄文晩期が出土したため2m拡張する。

12月4日（火）

1・8トレーニング8層。2・3トレーニングは4層。4・5・6・7トレーニングは5層。9トレーニングは埋めもどす。

12月5日（水）

午前中雨のため午後より作業開始。1トレーニング9層。2・3トレーニングは4層。4・5・7トレーニングは5層。

12月6日（木）

1・10トレーニングは8層途中。3・5・8（拡張）トレーニングは5層。4・6トレーニングは5層。14トレーニングは1層途中。2トレーニングは2層。4層の平板図作成。7トレーニングは5・6層の平板図作成。

12月7日（金）

1トレーニングは9層塞ノ神式土器出土。2トレーニングは8層。3トレーニングは11層。4トレーニングは6層。5トレーニングは2・3層の平板図作成。遺物取り上げ。4層途中。6トレーニングは5層途中。7・8トレーニングは5層。

12月10日（月）

1トレーニング12層掘り下げ。2トレーニングは8層途中。3トレーニングは11層で塞ノ神式土器出土。4・5・6・7トレーニングは5層、8トレーニングは断面整理、10トレーニングは9層、14トレーニングは10層。

12月11日（火）

1トレーニングは12層掘り下げ、2トレーニングは8層、3トレーニング11層、4・5トレーニングは8層。6トレーニングは5層の平板図作成。遺物取り上げ、7トレーニングは遺物取り上げ。8トレーニングは一応終了。写真撮影。10トレーニングは12層。12トレーニングは8層、14トレーニングは14層。

12月12日（水）

1・3・5・7は平板図作成遺物取り上げ。2トレーニングは断面図作成。4・6トレーニングは10層。10・14トレーニングは12層、12トレーニングは8層。

12月13日（木）

1トレンチは写真撮影。2トレンチは埋めもどし途中。3・10トレンチは12層、4・5・6・16トレンチは10層。7トレンチは5層、12トレンチは8層、14トレンチは15層。

12月14日（金）

1トレンチは断面図作成。3・10トレンチは12層、4トレンチは平板図、断面図作成。埋めもどし。5トレンチは写真撮影。埋めもどし、6・12トレンチは10層。7トレンチは6～7層。14トレンチは17層。16トレンチは11層。

12月17日（月）

1・4・5トレンチは埋めもどし。6トレンチは10層。7トレンチは7層。10トレンチは12層。12トレンチは10層。14トレンチは17層。16トレンチは12層。16ヶ所トレンチを新たに設定。

12月18日（火）

1トレンチは埋めもどし終了。3トレンチは平板図作成。遺物取り上げ。7トレンチは7層。10トレンチは14層。12トレンチは12層。13トレンチは1層。14トレンチは17層まで掘り上げ写真撮影。16トレンチは13層。18・20・21トレンチは8層。23トレンチは4層。

12月19日（水）

7トレンチは7・8層。10トレンチは17層。12トレンチは12、13層。13・18トレンチは8層。16トレンチは13層。20トレンチは9層。21トレンチは10層。23トレンチは5層。

12月20日（木）

7・18トレンチは8層、10トレンチは17層まで調査し終了。12・20・21トレンチは13層。13トレンチは9層。14トレンチは断面終了。16トレンチは14層、18トレンチは8層、22・24トレンチは1層。

12月21日（金）

7・21トレンチは7層。12・16・20トレンチは13層、13トレンチは9層。22トレンチは1・2層、23トレンチは平板図作成。遺物取り上げ、24トレンチは5層。

12月24日（月）

図面整理。土器洗い。

12月25日（火）

図面整理。土器洗い。調査地点の検討。

12月26日（水）

図面整理。土器洗い。注記作業。

昭和55年1月7日（月）

3・12・21・26トレンチは13層。16トレンチは17層。18トレンチは埋めもどし。20トレンチは15層。22・24トレンチは5層。26トレンチは13層。27トレンチは1層。

1月8日（火）

3・12・27トレンチは13層。16・21トレンチは17層で終了。20～26トレンチは15層で終了。

22トレンチは5層、23トレンチは拡張。25トレンチは1層、10・16は図面作成。

1月9日（水）

土器洗い。図面整理。

1月10日（木）

3トレンチは平面図作成。8トレンチは拡張2層まで掘る。12トレンチは15層。16トレンチは断面終了。埋めもどし。13トレンチは10～11層。24・25・23トレンチは6層。27トレンチは13層。7トレンチは断面図終了。

1月11日（金）

3トレンチは平面図作成。8トレンチは2～3層。12トレンチは断面設定、13トレンチは12～13層終了。23トレンチは5層。24トレンチは10～11層。25トレンチは4～5層。27トレンチは15層。31・32トレンチは1層。

1月14日（月）

8トレンチは3～5層。31・32・33トレンチは7層。34トレンチは11～12層。35トレンチは表土。27トレンチは終了。

1月16日（水）

8トレンチはカードを打つ。35トレンチは1～4層。23トレンチは拡張し1～4層。24トレンチは12層。31トレンチは8層。32・33トレンチは8層。34トレンチは15層。12・20・21・26・27トレンチは断面図作成。

1月17日（木）

午後より雨のため発掘調査は午前中行なう。8トレンチは平板図作成。35トレンチは4層途中。23トレンチは4層。24・34トレンチは15層で終了。31トレンチは8層。32トレンチは7層。33トレンチは15層。

1月18日（金）

8トレンチは平板図作成、遺物取り上げ。35トレンチは4～5層。23トレンチは4～5層。28トレンチの設定。30トレンチは本日より表層下15cmで15層のため本日終了。31・32トレンチは8層。33トレンチは7層。34トレンチは断面図終了。

1月21日（月）

8トレンチは5層。35トレンチは写真撮影。23トレンチは排土除去。30トレンチは終了。33トレンチは12層。

1月22日（火）

8トレンチは5層。23トレンチはB列の1層。3トレンチは14・15層。21トレンチは埋めもどし終了。28トレンチは11層上面。34トレンチ埋めもどし終了。24トレンチは断面図作成が終了。

1月23日（水）

23トレンチはC列の4層。8トレンチは4～5層。28トレンチは11～12。12・20・26・33

トレンチは埋めもどし途中。河口貞徳・成尾英仁氏来跡。

1月24日（木）

23トレンチはB、C、D列の4～5層。8トレンチは5層。35トレンチは4層の平板図作成、遺物取り上げ。28トレンチは13層上面で終了。1・20・26・32・33トレンチは埋めもどし終了。13・14・27・30トレンチは埋めもどし途中。成尾英仁氏来跡。

1月25日（金）

8トレンチは5層。35トレンチは4層。23トレンチは5層。13・14・20・27トレンチは埋めもどし終了。3・6トレンチは埋めもどし途中。

1月28日（月）

23トレンチは5層でカード打ち。8トレンチはカード打ち、写真撮影。35トレンチは4層の遺物を上げる。3・6・10・25トレンチ埋めもどし。

1月29日（火）

雨のため図面整理、土器洗い。

1月30日（水）

雨のため作業中止。土器洗い。

1月31日（木）

3・22トレンチは埋めもどし終了。10・25・31トレンチは埋めもどし途中。

2月1日（金）

23トレンチは平板図作成、断面掘り。7・25・31トレンチは埋めもどし終了。

2月4日（月）

23トレンチは平面図作成、遺物取り上げ、写真撮影、断面図作成（東西線）。8トレンチは平板図作成、遺物取り上げ、断面掘り。35トレンチは平板図作成、遺物取り上げ。

2月5日（火）

23トレンチは南北断面図作成、埋めもどし。8トレンチは断面図終了。35トレンチは断面掘り。

2月6日（水）

23トレンチは埋めもどし。8トレンチは埋めもどし。35トレンチは断面図作成、埋めもどし。本日で発掘作業は終了。

2月12日より県の収蔵庫で報告書作成のため整理作業を行う。

第2節 発掘調査の概要

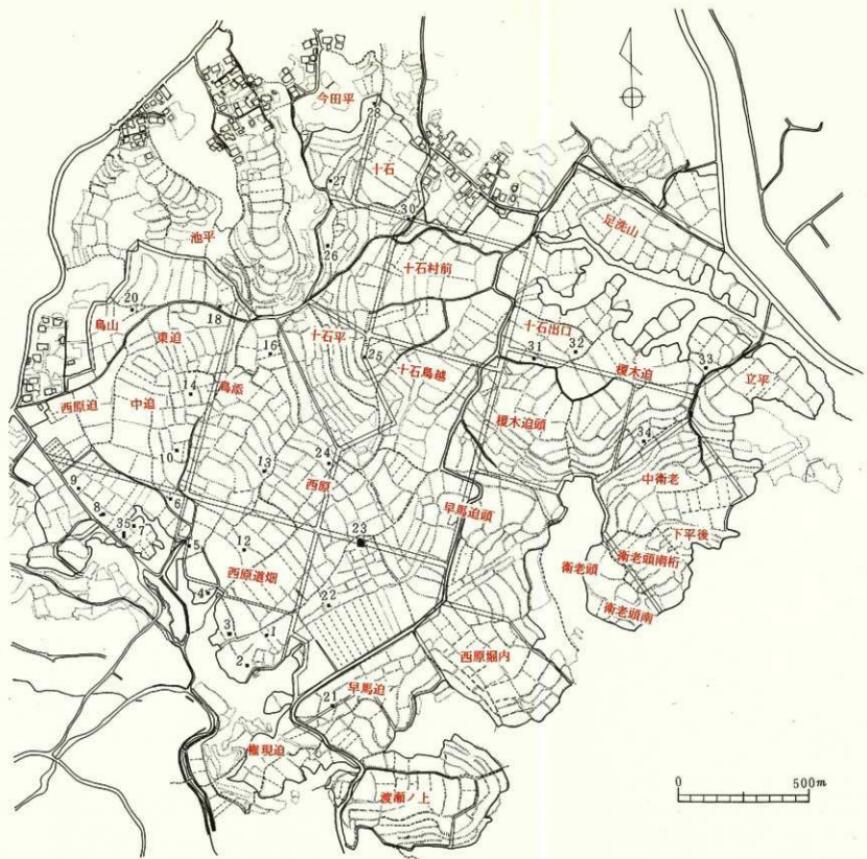
今回調査した地域は、ほぼ中央部に標高60～65mの小高い丘陵部があり、それを境にして東と西に大きく2つに分けられる。西側では傾斜をなして急斜崖になり、東側ではやや急傾斜をなして調査地域の最東部の丘陵に続く。南側でも同様である。北側は中央部の丘陵部延長上にありその末端部は急斜崖となる。これらの地形を利用して階段状の畠地が作られている。なお調査地域の対象面積は60haである。

トレンチ設定は、これらの地形を基にし、事前におこなった分布調査の結果をふまえ、また鳥山工区の事業設計図（道路部分・切り盛り関係）等を考慮して設定した。設定箇所は荒地、休耕地を主にして設置した。また、主軸を北方向に定め、トレンチ面積は4×4mないし3×3mである。なお、第7、第8、第23、第35トレンチでは、遺物の範囲確認のために拡張をおこなった。特に西原追では、遺物の出土が多いため第35トレンチを新たに設けることにした。

発掘調査は、鳥山遺跡（註2）に近い位置にある調査地域の西側縁辺より開始し、しだいに東側に移行する方法を取った。また、深さ2mを越すトレンチでは階段状に掘り下げていった。全体で35ヶ所トレンチを設定したが、周囲のトレンチの出土状況により、5ヶ所調査しなかった。第11、第15、第17、第19、第29の各トレンチである。

第3表 トレンチ調査の概要

トレンチ	小字	面積m ²	深さm	遺物	トレンチ	小字	面積m ²	深さm	遺物
1	早馬追	4×4	3.8	塞ノ神A式	20	鳥山	4×4	2.5	なし
2	"	4×4	1.9	弥生土器	21	早馬追	4×4	2.4	なし
3	西原道畠	4×4	4.2	塞ノ神A式	22	"	4×4	1.0	弥生土器
4	"	4×4	3.3	成川式土器	23	"	300	1.5	弥生土器・石斧・石匙
5	西原追	4×4	4.6	成川式土器	24	西原	4×4	3.0	弥生土器
6	"	4×4	3.8	弥生土器	25	十石平	4×4	1.8	成川式土器
7	"	4×6	2.7	弥生土器・繩文土器	26	十石	4×4	1.6	なし
8	"	4×16	2.4	"	27	十石	4×4	1.6	なし
9	"	4×4	1.3	なし	28	今回平	4×4	2.1	第11層より剝片・疊
10	中迫	4×4	3.6	黒曜石・チャートの剝片	30	十石	4×4	1.6	第12層より剝片・疊片
12	西原道畠	4×4	3.6	第12層に石器・剝片	31	十石出口	4×4	1.4	成川式土器
13	西原	4×4	1.8	なし	32	"	4×4	2.4	安山岩質の剝片
14	中迫	4×4	2.9	なし	33	榎木追	4×4	1.5	土器片
16	鳥添	4×4	3.3	第12層に繩文土器	34	"	4×4	1.4	なし
18	東迫	3×3	2.5	なし	35	西原追	4×12	2.1	弥生土器・繩文土器



第4図 各トレンチの配置図

第3節 烏山調査区の地質について

1. 地形概略

烏山遺跡は指宿市北部の鹿児島湾よりに位置し、海拔高度70mの微高地が標高東西に漸次高度を減していく丘陵地にある。遺跡の中央部より南東端に最高所はあるが、尾根は北西から南東にのびる方向と、北東から南西にのびる方向との二方向がある。低所には幅がせまくて深い谷が刻まれているが、この方向は前者の方向に一致し、高所にある幅の広い浅い谷は後者の方向と一致している。遺跡の南東端には北東から南西にのびる急崖がみられる。遺跡一帯はなだらかな丘陵地であるが、これは基盤の岩石類のつくる旧地形がなだらかであることに起因するものと考えられる。これは新期火山噴出物の厚さの合計がせいぜい10数m以下であることより、旧地形を薄くおおっていると推定されるからである。

遺跡外での調査によれば、基盤をつくる岩石類は東部海岸及び西部の渡瀬で見い出される黒色の強く溶結した阿多火砕流と、その上にのる非溶結の今和泉火砕流があり、これらは遺跡内においては露頭は見られない。

2. 層序

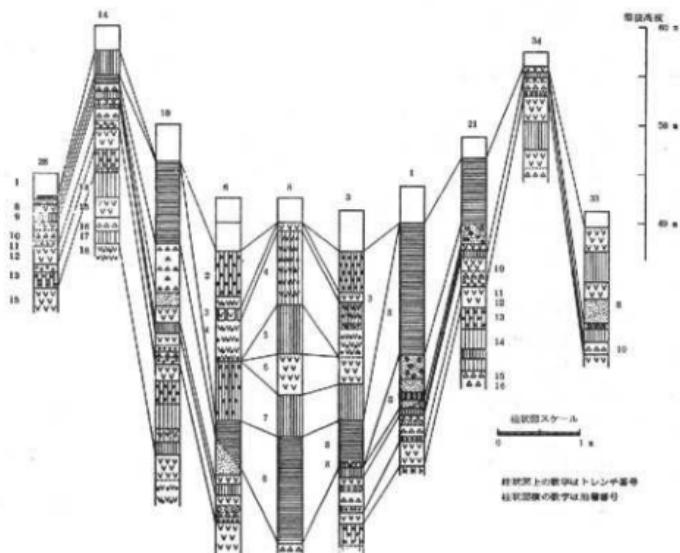
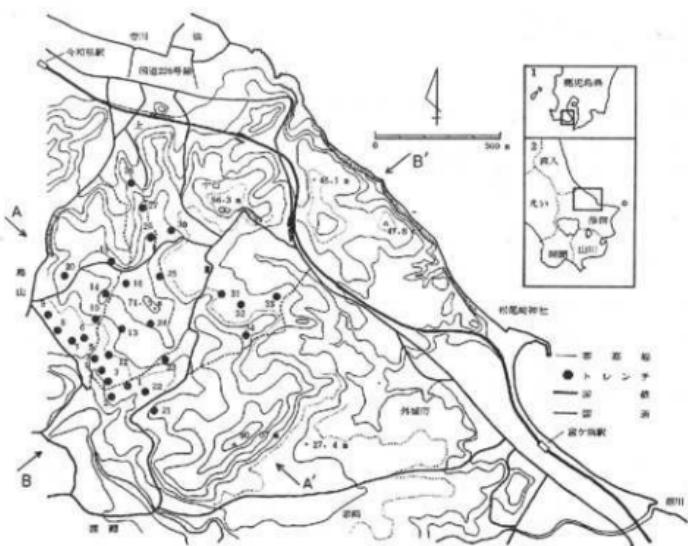
烏山遺跡では、上層の間間岳噴出物互層から最下層の唐山火山噴出物まで18層が区分された。いずれも火山噴出物とその間にはさまる黒色腐植土を主とし、低所のトレンチの一部の層間にごく部分的に砂レキ層が見られる。各層の名称および特徴は次のようである。

- 1層 表土・耕作土。トレンチによっては二層に区分されることがある。
- 2層 含火山レキ黒色腐植土。火山レキはやや角張った径1~2cmのもので、基質の腐植は粘質がなくサラサラしている。
- 3層 a 固結明紫色火山灰。ごく一部のトレンチのみに見い出される細粒の火山灰である。
b 固結紫色火山レキ質火山灰。火山レキは角張った径5~6mmのもので、その間を固結した紫色の火山灰が埋めている。数層のフォール・ユニットに区分される。また、トレンチによっては連続せずブロック状となる。
- 4層 含火山レキ黄褐色火山灰。やや円型の径2~3mmの火山レキや、同大の赤褐色風化スコリアが点在する。基質はやや汚れて黒ずんだ色の黄褐色火山灰である。
- 5層 含火山レキ暗褐色腐植土。やや角張った径7~8mmの火山レキが点在している。下部ほど粘質を帶びているがそれほど著しくはない。
- 6層 ガラス質橙色火山灰。遺跡西部の7・8トレンチでは層が明瞭であるが、他のトレンチではやや不鮮明となり上下の層と混入している。火山灰のみで火山レキ、スコリア等は含まれていない。

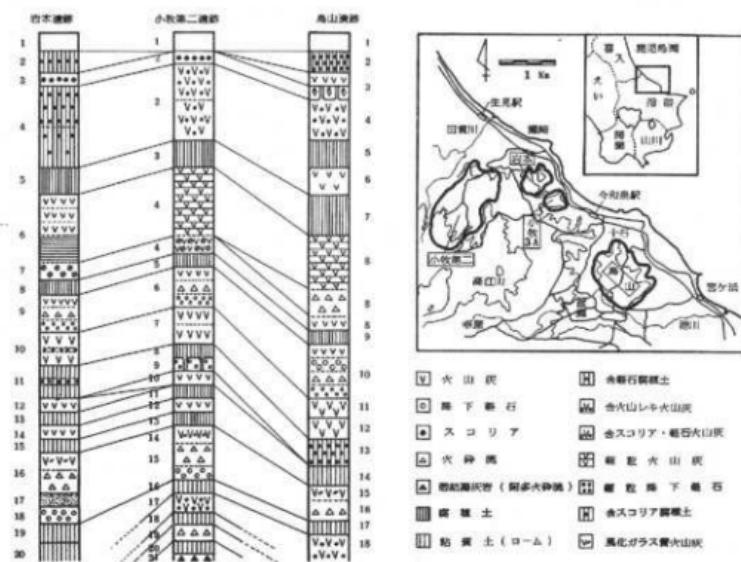
- 7 層 含軽石黒色腐植土。亜円型の径3～4cmの軽石が点在する。軽石は白色未風化であり、有色鉱物の量が多いことより池田火山起源の軽石の浮き上がりと考えられる。
- 8 層 a 小牧火山灰。細く成層した白色～黄白色火山灰層で、層によっては小火山レキ。軽石がある。
b 池田火砕流。トレーナーにより堆積相に遡りがみられるが、一般に白色火山灰の基質をもち、径5～6cm（まれに20cm以上）の白色軽石が無秩序に混入している。トレーナーによっては流水により二次堆積相を示している。
c 池崎火山灰。黄白色粘質の火山灰であるが、小角レキも多数混入している。特徴的に黒雲母がはいっている。また径5cm以内の安山岩片、カコウ岩片が散在し、部分的にはサゲ・ストラクチャーが明瞭である。
- 9 層 黒色腐植土
- 10層 a アカホヤ火山灰。下部ほど粗粒となる。
b 軽石濃集層。軽石は平均粒径1.5cm位で、白色亜円型である。
c 火砕流。基質はガラス質火山灰で、それらの中に最大粒径10cmの良く発泡した軽石が散在している。
d 降下軽石。大豆大以下の角張った軽石よりも火山灰はみられない。トレーナーによっては特に濃いオレンジ色となっている所がある。
- 11層 乳白色火山灰。ガラス質火山灰であるがやや粘質をおびている。12層との境界は直線的でなく、波状から円形状に複雑に入りこんでいる。
- 12層 茶褐色火山灰。上位の11層より粘質があり、黒ずんでいる。まれに径1cm以下の橙色軽石が点在する。
- 13層 含黄色軽石黒色腐植土。軽石は最大粒径4cmで腐植土中に点在しているが、トレーナーによっては薄く層をなしているところもある。降下軽石層の周辺堆積相と考えられる。
- 14層 茶褐色粘質ローム。色はチョコレート色から黒茶色まで変化するが、いずれも粘質が強い。
- 15層 風化黄褐色火山灰。風化して黄褐色をしているが粘質はあまりなく、ガラス質である。
- 16層 入戸火砕流。いわゆるシラスと俗称されるもので、風化して黄橙色を示す。部分的には下位に大隅降下軽石を伴っている。
- 17層 茶褐色粘質ローム。
- 18層 含軽石・スコリア黄橙色火山灰。軽石・スコリアは最大粒径1～2cm位で、風化して柔らかくなっているが、層全体としては硬質である。

最大層厚	柱状圖	名 称	年 代	噴 出 源	
30 cm	1	表 土			
120	2	含火山レキ帶黒色腐植土			
4	a	固結明鶯色火山灰			
15	b	固結紫色火山レキ質火山灰			
70	4	含火山レキ帶黃かっ色火山灰			
60	5	含火山レキ暗かっ色腐植土			
50	6	ガラス質褐色火山灰			
85	7	含鉄石黒色腐植土	3520 ± 100 Y. B. P. 3620 ± 140 4040 ± 120		
120	a	小牧火山灰			
200+	b	池田火神流(一次、二次)			
20	c	池崎火山灰			
15	9	黒色腐植土	4640 ± 80		
15	a	アカホヤ火山灰			
10	b	黄白色砾石	6400 ± 110		
15	c	火 砂 流			
7	d	降 下 砂 石			
25	11	乳白色火山灰			
15	12	茶かっ色火山灰			
30	13	含黄色砾石黒色腐植土	10630 ± 220	板 島	
50	14	茶かっ色粘質火山灰(ローム)			
30	15	風化茶かっ色火山灰			
50	16	入戸火神流	22000 ± 850	あ い ら	
20	17	茶かっ色粘質火山灰(ローム)			
30+	18	含鉄石・スコリア質褐色火山灰		唐 山	

第5図 烏山調査区の層位図



第6図 烏山調査区地質柱状図



第7図 指宿市北部台地各遺跡の地層対比（柱状図横の数字は地層番号）

3. 各層の堆積様式

遺跡では前述のように、噴出源、年代を異にする十数層の火山噴出物が堆積しているが、これらのうち遺跡近くに噴出源のあるものは開聞岳噴出物、池田火山噴出物、および11・12層、最下位の唐山火山噴出物である。他はいずれも噴出源が指宿地域外にあり広域に分布する火砕物質である。

遺跡内では開聞岳噴出物は低所のトレンチでのみ見い出され、海拔50m以上では見られないが、堆積していても厚さが薄い。また低所ほど層厚が厚くなる。開聞岳噴出物はそのほとんどが空中降下の火砕物質であり、堆積時にはほぼ一様な厚さで堆積したはずであるから、その後の流水の作用等により二次的に削除され薄くなつたものと考えられる。同様の堆積様式が8層の池田火砕流、16層の入戸火砕流にも見られるが、これは火砕流が旧地形の谷にそって流动堆積したために低所で厚く、高所で薄くなつたものである。

以上を除く他の各火山噴出物はどの高度においてもほぼ一様の厚さを保っている。これらはいずれも降下火砕物質である。

遺跡内の低所のトレンチにおいては火山噴出物以外に砂レキ層がある。砂レキ層は池田火山噴出物の間にはさまれており、その上下の層は安定であることより、この時期に部分的に流水

の作用をこうむったものと推定される。厚さは10~50cmと変化する。

4. 各遺跡との地層対比

指宿北部地域では、小牧ⅢA遺跡、岩本遺跡、小牧Ⅱ遺跡の発掘がおこなわれ、すでに岩本遺跡、小牧Ⅱ遺跡については報告がなされている。今回の鳥山調査区の地層とそれらとを対比したもののが第7図である。

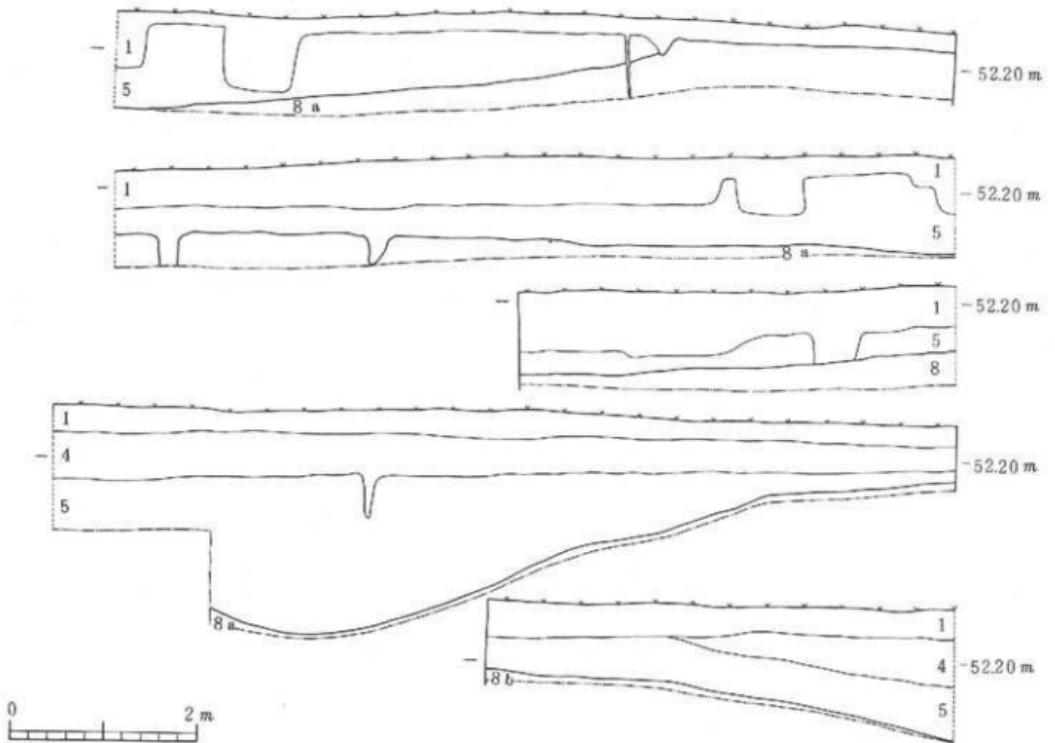
指宿地方では噴出源、年代のはば確定した数枚の火山噴出物があり、鍵層として有効である。第7図で明らかであるように南部にゆくに従い開聞岳噴出物、池田火山噴出物が厚くなり、火砕物質の枚数も多くなる。逆に北部にゆくに従い、これらは薄くなり、黄色軽石層や入戸火砕流、およびそれらにはさまれる火砕物質が厚くなってくるようである。

参考文献

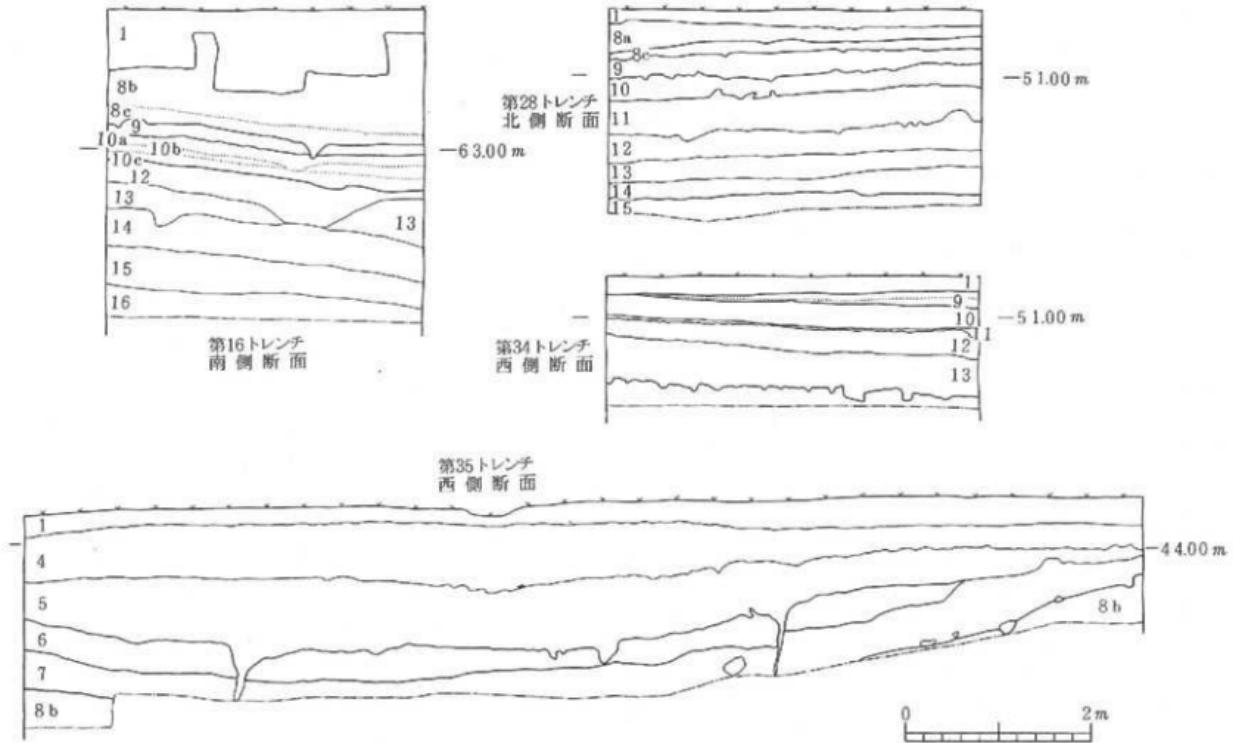
- 荒牧重雄（1965） 始良カルデラ入戸火砕流の14c年代 地球科学No.80, 38。
- 宇井忠英（1967） 鹿児島県指宿地方の地質 地質報73, 10, 477~490
- 宇井忠英（1973） 幸原火砕流—極めて薄く拡がり堆積した火砕流の発見
火山第2集18, 3 153~168
- 成尾英仁（1978） 岩本遺跡における層位 指宿市教育委員会「岩本遺跡」P.14~17
- 成尾英仁（1979） 池田カルデラ形成前後の火山噴出物（演旨）第四紀学会講演要旨
集8, 7
- 古川博恭、中村真人（1969） 開聞岳噴出の火山灰層の14c年代 地球科学23, 6
259~260
- 町田洋、新井房夫（1976） 広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義
科学46, 6 339~347
- 松井健（1966） 大隅半島笠野原台地の“アカホヤ”層の噴出時代 地球科学No.87,
37~39



第8図 第3・7・8トレンチの断面図



第9図 第23トレンチ西・南側断面図



第10図 第16・28・34・35トレンチの断面図

第Ⅲ章 各トレントの調査と出土遺物

調査地域に35ヶ所のトレントを設定し、そのうち30ヶ所を調査した。その結果、調査地域の中央部より西側を中心とし21ヶ所で遺物の出土が見られた。(第3表参照)

特に、西原道場の第3トレントでは第12層に塞ノ神A式が集中して出土し、西原追の第7・8・35トレントでは第4層に弥生土器が出土し、第5層に縄文時代晚期の遺物が出土した。また第7トレントでは6層に貝殻条痕を施した土器が出土した。早馬追の第23トレントでは第4層に弥生土器の遺物が集中して出土した。

第1トレント (小字名 早馬追)

この箇所は早馬追の西側にあたる。面積は 4×4 mである。層位は、表層下に池田火山の噴出物が1.1mも厚く堆積しており、第15層の入戸火碎流の風化層まで3.8mを計る。

遺物は第12層上部に塞ノ神A式土器が2点出土した。

塞ノ神A式土器 第1図 (001~002)

001, 002は、塞ノ神A式である。001は、口縁部で口唇部にキザミを有する。斜状の籠描きの区画内に撚糸文が回転押捺されている。色調は、褐色である。焼成は普通で、胎土は石英砂を含む。002は、口縁部下で横方向に連点文を施し、区画内に撚糸文が回転押捺されている。色調は褐色である。焼成は良好で、胎土に石英砂を含む。



第11図 第1トレントの出土遺物

第2トレント (小字名 早馬追)

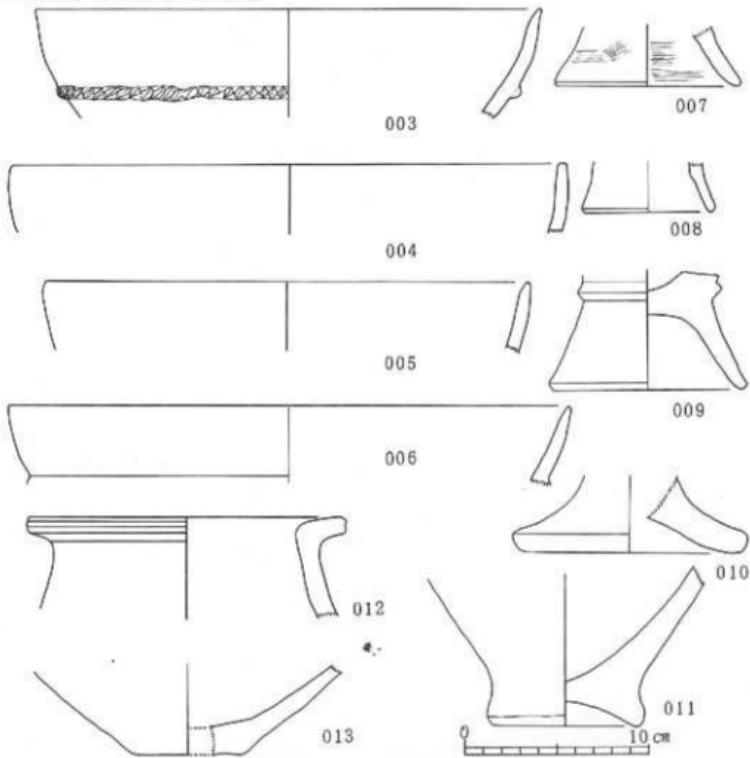
早馬追の最西部にあたり、開析谷の縁辺部に位置する。面積は 4×4 mである。層位は表層下に第2層があり、第3層明紫ゴラをはさみ第4層が堆積している。その下には第8a層があり、表層からは1.9mの深さである。

遺物は、第4層に成川式土器の壺形土器・壺形土器・高环が出土した。

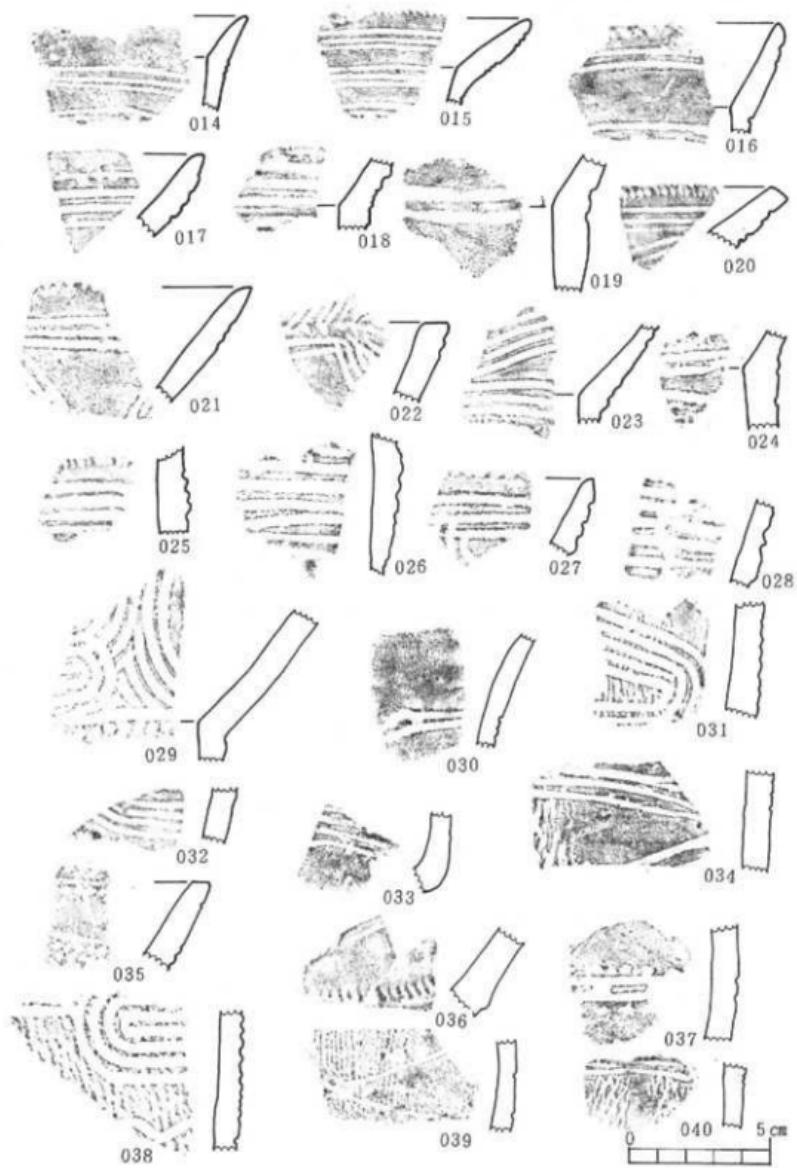
成川式土器 第12図 (003~013)

003~006は、壺形土器の口縁部である。色調は明褐色で、焼成は良好である。胎土は石英砂、黒雲母等が含まれる。003は口縁部直下に凸帯を施し、キザミを布目押捺で施しており、内外面ともに横位の籠ナデである。004は口唇部がほぼ平坦面をなし、内外面ともに横位の籠ナデである。外面にはススが付着している。005は口唇部が先細り、丸味をおびる。内外面ともにていねいな横位の籠ナデである。006は口縁直下に凸帯を施し、キザミを布目

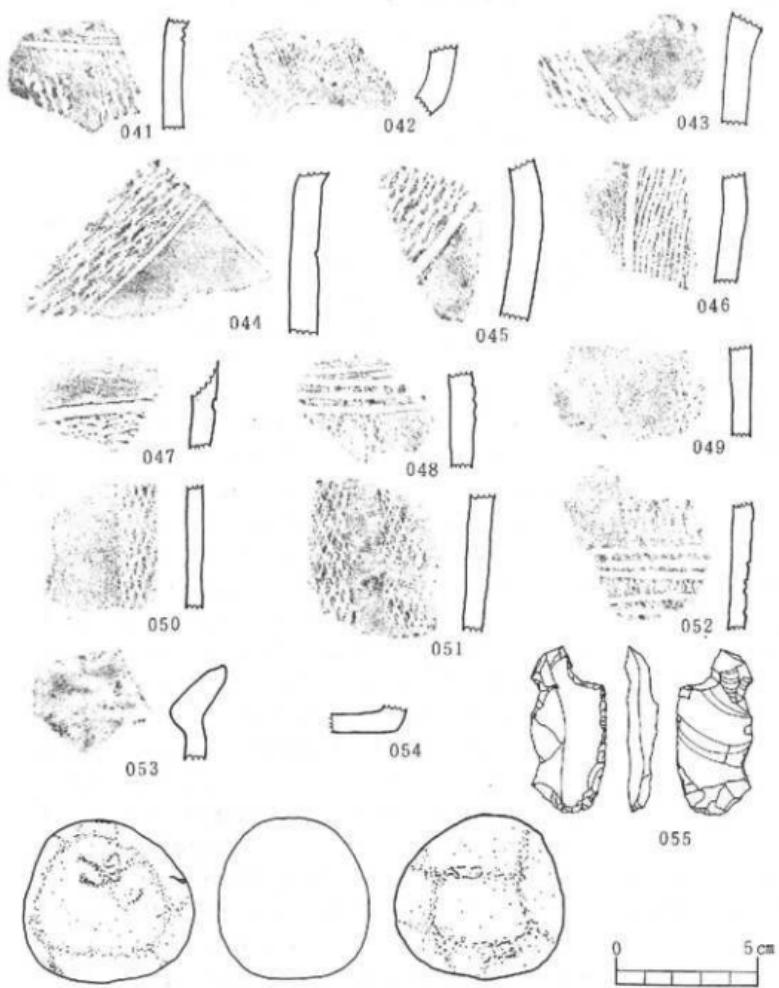
の押捺で施しており、口唇部がやや丸味をおびる。007～009は壺形土器の脚台である。色調は明褐色で、008だけが灰褐色である。焼成は普通で、胎土に石英砂・黒雲母を含む。007は内外面ともに横位の箇ナデ調整である。008は竈ナデ調整であるが、荒い調整である。009は脚台と底部とのきかいに凸帯をめぐらしている。脚台は内外面ともに縦位の箇ナデ調整である。010は台付鉢ではないかと思われる。分厚い脚台をなしている。ていねいな横位の箇ナデ調整をおこなっている。011は壺形土器で脚台が低いつくりである。調整は甌が縦方向箇ナデで、脚台は手調整のあと竈で横位に調整してある。全体に雑な作りである。色調は淡紅色で、焼成はよくない。胎土には黒雲母・石英砂が含まれる。012は弥生中期の壺形土器の口縁部である。口縁部は逆L字状に屈折しており、口縁端部が貼り付けになっている。横位のハケ調整をし、色調は褐色で、焼成は良好である。013は壺形土器の底部である。ハケ調整し、色調は明褐色である。



第12図 第2トレンチの出土遺物



第13図 第3トレンチの出土遺物①



第14図 第3トレンチの出土遺物② 056

第3トレンチ（小字名 西原道畠）

この箇所は、第2トレンチと同様に開析谷に続く台地の縁辺部にあたる。縁辺部の西側は、急斜崖になっておりその下には渡瀬川が流れている。面積は $4 \times 4\text{ m}$ である。台地の縁辺部で

あるためか、表層下に黒褐色土が厚く堆積している。

遺物は第5層にあたるところより粘板岩質の石片が一点、玉髓質の縦長の石匙が1点出土している。また、第12層には沈線文、刺突連点文、撚糸文等の見られる塞ノ神A式が多量に出土している。同時に、安山岩質の大小の亜円錐が出土している。

塞ノ神A式土器 第13、14図（014～054）

014は口縁部である。頸部が「く」の字状に屈折して、ラッパ状の口縁をなす。口縁部には、沈線を施している。色調は茶褐色。焼成は普通である。胎土には石英砂が含まれる。

015は口唇部に綾杉状にキザミを施し、区画された沈線を施す。調整は箇でし、色調は明褐色で焼成は良好である。胎土には石英砂を含む。016は口唇部にキザミを施し、二条を一组とした沈線区画を施す、頸部にも同様の方法をとる。横方向に箇調整をしている。色調は褐色で、焼成は普通であり、胎土に石英砂が含まれる。017は平坦面の口唇部に綾杉状のキザミを施し、口縁部には、三条一組の区画をなす。口縁端部附近でやや内彎する。色調は暗茶褐色で、焼成は普通である。胎土に石英砂が含まれる。018は頸部が「く」の字状に屈折する附近で、ややざつに沈線を施している。色調は明褐色で、焼成は良好である。019は、頸部にやや太い沈線を施している。色調は赤褐色で、焼成はよくない。胎土には砂粒を多く含む。

020は口唇部が平坦となり、外側にキザミを施し、沈線が平行と斜状の組合せである。色調は赤褐色で、焼成は良好である。021は口縁部がやや長く開き、口縁端部の内側に段をもち、キザミを施している。外面の施文は三条一組の平行沈線と斜状沈線の組合せである。調整は内外面ともていねいな横方向の箇調整である。色調は明褐色で、焼成は良好である。022は口唇部を平坦にし、綾杉状のキザミを施し、器形は波状口縁となる。沈線を斜状に施す。色調は暗褐色で、焼成は普通である。胎土に石英砂を含む。023は頸部が屈折する附近で、口縁部には平行と斜状との沈線を施す。頸部下には一条のキザミを施している。色調は褐色で、調整はていねいに箇ナデしてある。焼成は普通である。024は頸部附近で、口縁部に沈線で区画し、撚糸文を施している。頸部下は斜状に区画した中に撚糸文を施す。色調は明褐色で、焼成はよくない。025は頸部附近で、一条のキザミを横方向にめぐらせ、横方向に沈線を施す。色調は暗褐色で、焼成は普通である。026は胴部である。横方向を基調とした沈線を施す。色調は暗茶褐色で、焼成はよくない。胎土に石英砂を含む。027はやや口縁端部が細くなり、そこにキザミを施している。器面には沈線を施す。調整はていねいに箇でおこない、色調は茶褐色で、焼成は普通である。028は胴部である。平行な沈線を基調とし、波状沈線を縦方向に施す。色調は明褐色で、焼成は普通である。029は口縁部である。頸部には横方向に連続刺突文を施し、口縁部には渦状あるいは曲線の沈線を施す。色調は暗茶褐色で、調整はていねいである。焼成は良好である。030は口縁部である。横方向に箇調整したのち、二条の沈線を施している。色調は暗褐色で、焼成は普通である。031は縦位の撚糸文を間隔をおき施したのち弧状の5本の沈線を施している。色調は暗褐色で、焼成は良好である。胎土に石英等を含む。032は胴部である。弧状の沈線を施していると思われる。色調は暗褐色で、焼成は普通であ

る。033は丸味をおびた底部となり、浅い沈線が横位に施されている。色調は明褐色で、焼成はよくない。034は胴部である。間隔をあけ縦位にややふとめの撚糸文を施したのち、横方向あるいは斜状の沈線を施す。色調は暗茶褐色で、焼成は普通である。胎土に石英砂・黒雲母等を含む。035は口縁端部が段をなし、外側にキザミを施す。沈線で区画しその間に連続刺突文を施す。色調は暗褐色で、焼成は普通である。胎土に石英砂粒を含む。036は口縁部である。頸部附近に一条のキザミを施し、横方向の箇調整をしたのち、斜状の沈線を施している。色調は赤褐色で、焼成は良好である。037は胴部に2本の平行な沈線を施し、その上に刺突文を施している。色調は暗褐色で、焼成はよくない。038は胴部である。幅の太い撚糸を縦位に施したのち、4本の沈線を弧状に施し、また波状沈線もその下に施している。内面はていねいに横方向の箇調整をおこなっている。色調は明灰色で、焼成は良好である。胎土に石英砂を含む。039は底部附近で、底部の貼り付け部が見られる。縦位の細い撚糸文を施したのち、不規則な沈線を施している。撚糸文は間隔をおいて施してある。色調は明褐色で、焼成は良好である。器形からして小型の上器ではないかと思われる。040は頸部附近である。間隔をあけ縦位に撚糸文を施し、頸部附近で沈線を横方向にめぐらす。内面は横方向の箇調整をしてある。色調は暗褐色で、焼成はよくない。041は間隔をあけ縦位にやや太い撚糸文を施し、頸部附近に横方向の沈線を施す。撚糸文と撚糸文との幅は約1.2cmである。色調は明褐色で、焼成は良好である。042は底部附近である。丸味をおびて底部とつながり、底部は貼り付けである。この附近まで、約1cmの間隔をあけて縦位の細い撚糸文を施す。色調は赤褐色で、焼成は普通である。043は頸部附近である。頸部に横位の連続刺突文をめぐらし、胴部には斜状の区画内に撚糸文を施している。色調は明褐色で、焼成は普通である。胎土に石英砂、輝石等が含まれている。044は胴部である。斜状の沈線の区画内に、撚糸文を施している。やや大きめの撚糸である。色調は褐色で、焼成は良好である。045も044と同様である。色調は明褐色で、焼成は普通である。046は胴部である。縦位の沈線の区画内に縦位に撚糸文を施している。撚糸は細目である。色調は明褐色で、焼成は普通である。047は横位の沈線の区画内に横方向に撚糸文を施している。撚糸はやや太めである。色調は明褐色で、焼成は普通である。胎土に石英砂を含む。048は胴部である。撚糸文と撚糸文との間隔を1cmにおき、それを一組の基調とし縦位に施したのち、横方向に3本の沈線を施していると思われる。色調は暗灰色で、焼成はよくない。049は胴部で縦位の撚糸文を施す。色調は明褐色で、焼成は普通である。050は049と同様であるが、薄手である。色調は暗褐色で、焼成はわるい。051は胴部である。撚糸文と撚糸文の間隔は1.3cmで、縦位に施している。薄手である。色調は明褐色で、焼成は普通である。052は胴部である。施文方法は050と同様である。色調は赤褐色で、焼成は普通である。053は口縁部である。口縁端部は先細りである。口縁部は貼り付けである。文様は見られない。内外面とも粗雑な調整である。色調は明褐色で、焼成は普通である。胎土に石英砂・輝石を含む。頸部が球形状で口縁部は貼り付けである。054は底部である。胴部との貼り付け部分がのこる。やや粗雑なつくりである。内外面とも箇調整

がおこなわれている。色調は明褐色で、焼成は普通である。胎土に石英砂等を含む。055は縦長の石匙である。石材は玉髓質である。刃部は細い剝離がなされている。長さ5.9cm、幅2.6cm、重さ17gである。056は安山岩質の亜円錐である。表面が風化をうけており、使用痕らしき面も見られる。最大径6.0cm、最小径5.7cm、重さ251gである。

第4トレンチ（小字名 西原道畑）

開析谷の縁辺部の箇所で、南側・西側とも急斜崖となっている位置にある。層位は第2層を中心として厚く堆積しており、第8層までの深さは3.3mを計る。

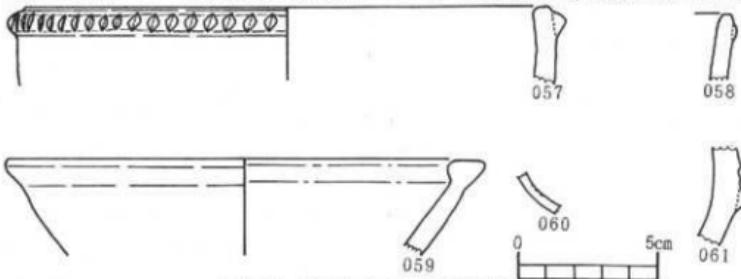
遺物は、第2層に成川式の土器片の散布が見られた。

第5トレンチ（小字名 西原迫）

この箇所は、第4トレンチと同一の地形上にあり、標高もほぼ同じで約40mの位置である。西側は急斜崖となっている。面積は4×4mである。層位は、ほぼ第4トレンチと同様であるが、各層が厚く堆積しており、第2層では1.2mを計る。また、第8層を4.6mの位置で確認した。遺物は、第2層で成川式土器片、第4層では弥生土器の壺形土器・高环・壺形土器が出土している。

弥生土器 第15図（057～061）

057は、壺形土器の口縁部である。口縁端部は平坦面をなし、若干内擣する。その外側には三角の凸帶をめぐらし、板によるキザミを施している。横位の範ナゲ調整をし、色調は赤褐色である。焼成は良好で、胎土に石英砂を含む。058は壺形土器の口縁部で、口縁端部外側に薄く貼り付けを施してある。その下に2本の弧状の沈線を施してある。色調は黒褐色で、焼成は普通である。059は高环の环部である。口縁端部に内側に張り出す貼り付けを施し、口唇部は平坦面をなす。ていねいな横位の範調整をおこなっている。色調は明褐色で、焼成は普通である。060は壺形土器の頸部附近である。頸部には3本の弧状の浅い沈線を施している。器面はていねいにハケ調整してある。色調は灰褐色で、焼成は普通である。061は肩部である。三角凸帶にキザミを施し、範で沈線を施してある。色調は黒褐色で、焼成は普通である。



第15図 第5トレンチの出土遺物

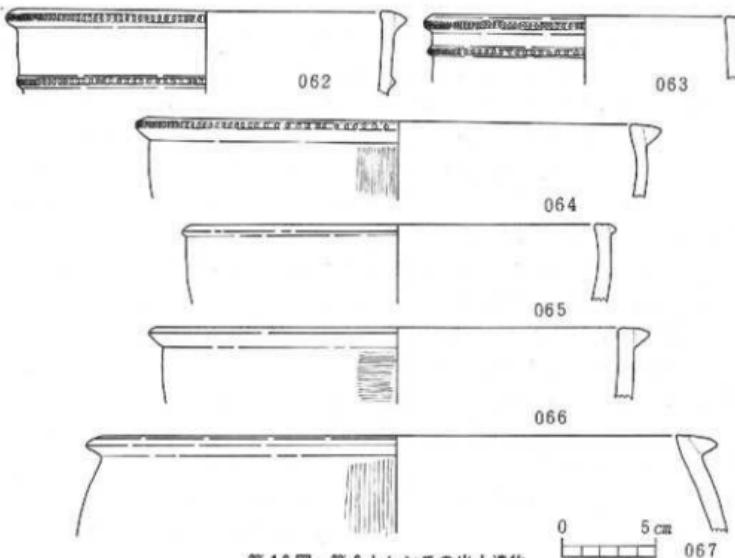
第6トレンチ (小字名 西原迫)

この箇所は、細長い西原迫の南側に位置し、中迫との境にあたる。面積は 4×4 mである。層位はほぼ基本層位をなしており、第3層が表層から1.4mの位置で確認された。第12層まで掘り下がった。そこまでの深さは3.8mである。

遺物は第4層に弥生土器の菱形土器・壺形土器が出土した。

弥生土器 第16図 (062~067)

062は菱形土器の口縁部である。口縁部の外側に粘土を貼り付け、やや外下りに仕上げている。口縁下に凸帯とともにキザミを施している。器面は箇調整をおこなっている。色調は明褐色で、外側面にはススが付着している。焼成は良好で、胎土の粒子は比較的細かで、石英砂を含む。063は口縁端部の外側に貼り付けをし、凸帯は台形状をなし口縁部下に断面三角形の凸帯とともにキザミを施している。口縁端部は平坦面をなす。調整は横位の箇ナデである。色調は褐色で、焼成は普通である。胎土に石英砂を含む。064はやや内彎する口縁部である。口縁端部外側に貼り付けをやや下りに仕上げている。キザミを端部に施している。器面はハケ調整をおこなっている。色調は明褐色で、スス痕が見られる。焼成は良好で、胎土の粒子は比較的細かである。065は口縁端部を平坦にし、外側・内側に引き出している。外側は折り曲げ状になっている。器面の横位の箇調整をしてある。色調は明褐色で、焼成は普通である。胎



第16図 第6トレンチの出土遺物

土に石英砂を含む。066は口縁端部を平坦にし、その外側に貼り付けをおこなっている豊形土器の口縁部である。調整は横位のハケ調整である。色調は明褐色である。焼成は普通で、胎土に石英砂・黒雲母等が含まれる。067は口縁端部を外下りにし、その外側に粘土帯を貼り付けている。やや内轉する豊形土器である。調整は縦位の箆ナデである。色調は暗褐色で、焼成は良好である。胎土に石英砂を含む。

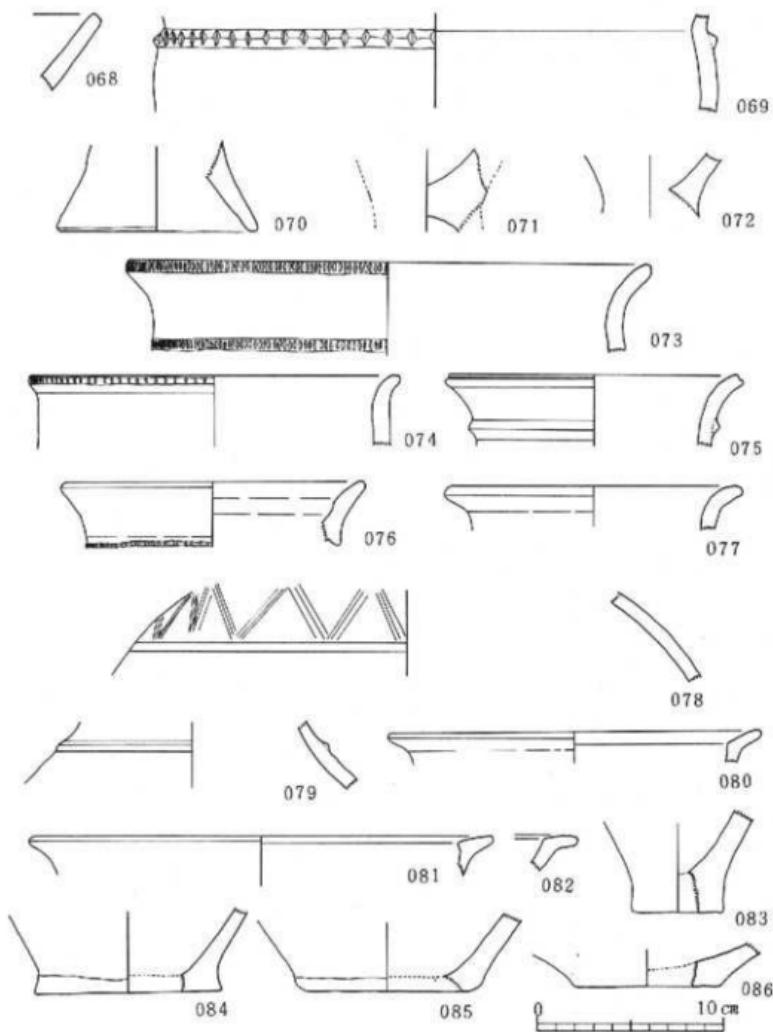
第7トレンチ (小字名 西原追)

この箇所は、南にのびる舌状の台地上にあり、第6トレンチとは開析谷により隔てられる。面積は当初4×4mであったが第4層の遺物が広がりを見るため3m南に拡張した。肩位は、ほぼ基本肩位と同様である。第8層まで確認したが、その深さは北側面で0.6m・南側面で2.6mを計り、北側にかなりの傾斜が見られた。

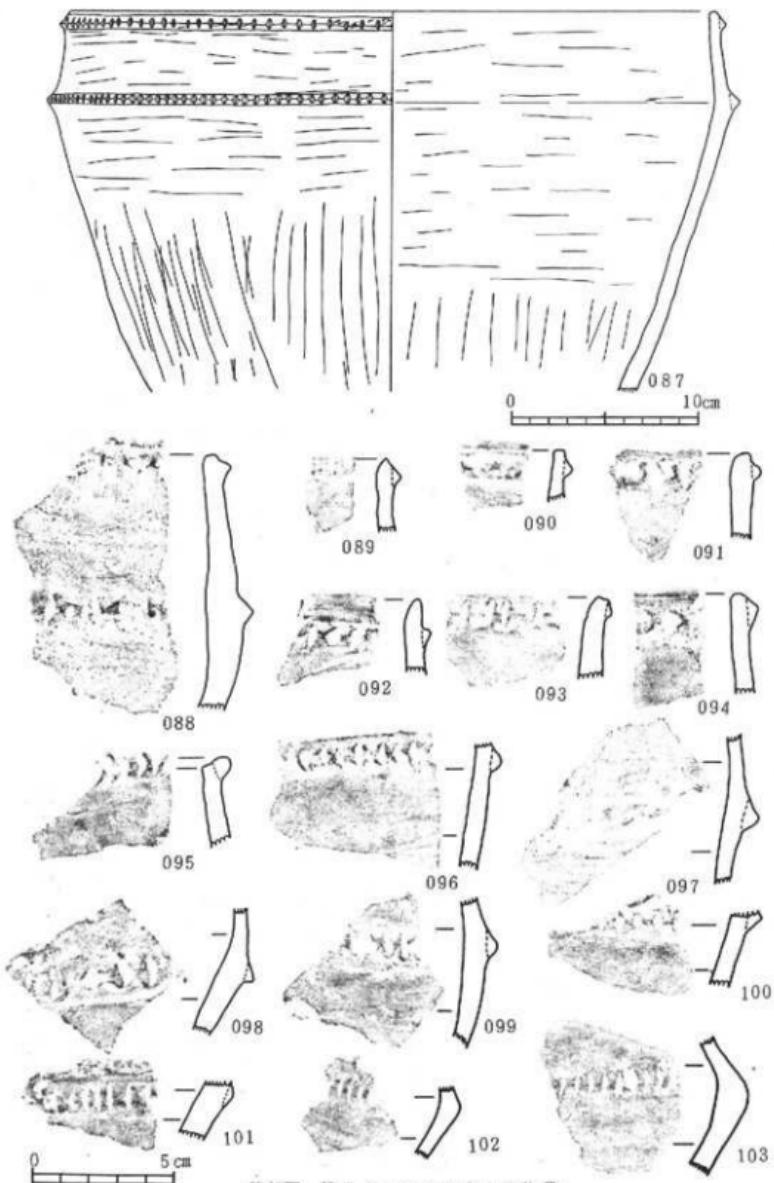
遺物は、第4層に弥生土器、第5層に绳文晚期の浅鉢・深鉢・豊形土器が出土し、6層には器面に条痕を有する土器が出土している。石器は、打製の石斧が表層で2点・第4層で3点・第5層で3点出土している。

成川式土器 第17図 (068～072) 弥生土器 第17図 (073～086)

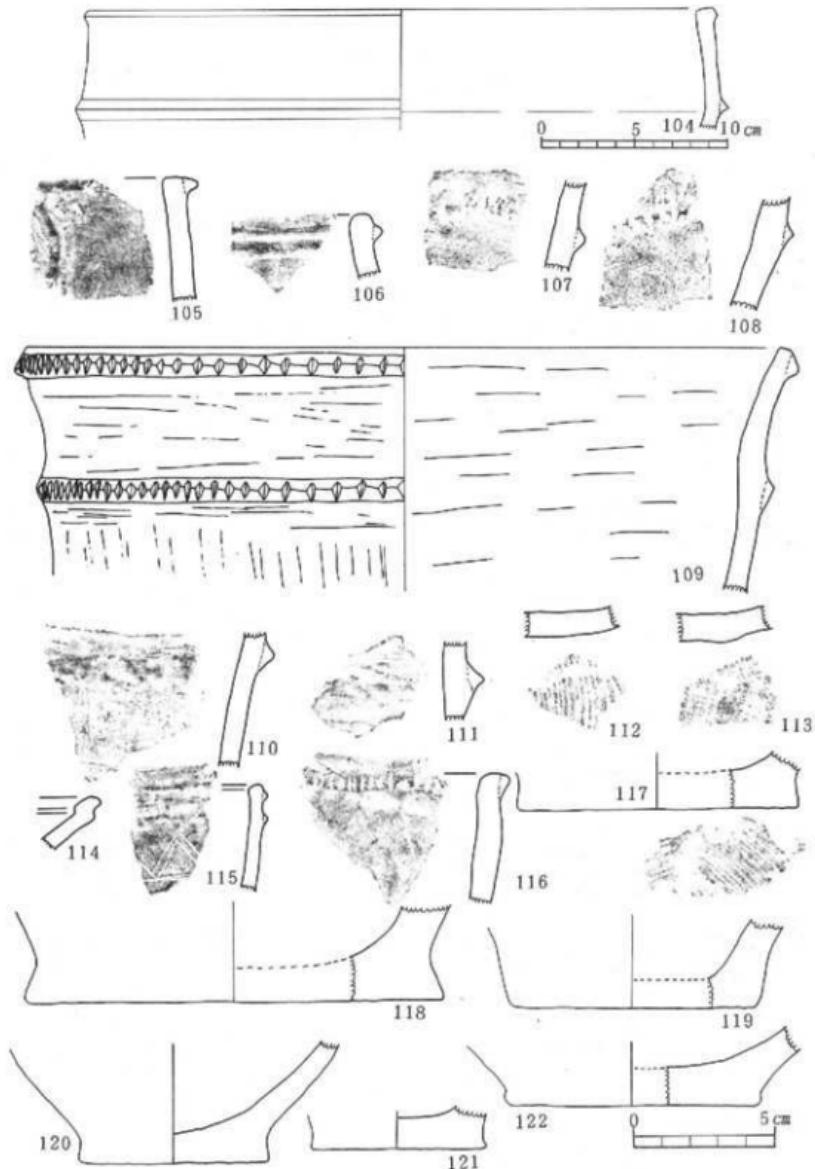
068は豊形土器の口縁部である。口縁端部が平坦面をなし、やや外側に開く。器面は箆調整である。胎土に砂粒を含んでいるせいか器面がザラザラしている。色調は赤褐色である。焼成は良好である。069は頸部附近である。頸部に断面三角凸帯をめぐらし、キザミを施している。口縁部がやや外反する器形をなす。器面はザラザラしており、色調は赤褐色である。焼成は普通である。070は豊形土器の脚台である。器面調整は箆ナデである。色調は黄褐色である。焼成は普通である。071は豊形土器の底部附近である。脚台との接合に粘土帯を施している。色調は明褐色で、焼成はよくない。胎土に石英砂を含む。072は豊形土器の底部附近である。脚台との接合に粘土帯を施し、調整は箆磨きをしている。色調は灰褐色である。焼成は普通である。胎土に石英砂を多く含む。073は豊形土器の口縁部である。口縁部が外反し、口唇部には間隔の不規則なキザミを施している。また、口縁下にもキザミを施している。内外面とも横位のハケ調整をしている。色調は明褐色で、焼成は普通である。胎土に細い砂粒を含んでいる。074は口縁端部が外反し、口唇部にキザミを施している。調整は横位のハケ調整である。色調は褐色でススが付着している。焼成は良好で、胎土に細い砂粒を含む。075は壺形土器の口縁部である。頸部より外反し、口縁端部の外側に粘土帯を貼り付けて、口縁下に断面三角形の凸帯を施している。内外面とも箆磨き調整である。色調は灰褐色で、焼成は普通である。胎土にはやや大きめの砂粒を含む。076は壺形土器の口縁部である。口縁下に凸帯をし、キザミを施して口縁端部から曲線を描くように貼り付けている。内側では段をもつ。横位の箆調整をおこない、色調は明褐色である。焼成は普通で、胎土に粒砂を含む。077は壺形土器の口縁部で、頸部より外反し、口縁端部は丸味をもつ。外側の器面はていねいな箆磨



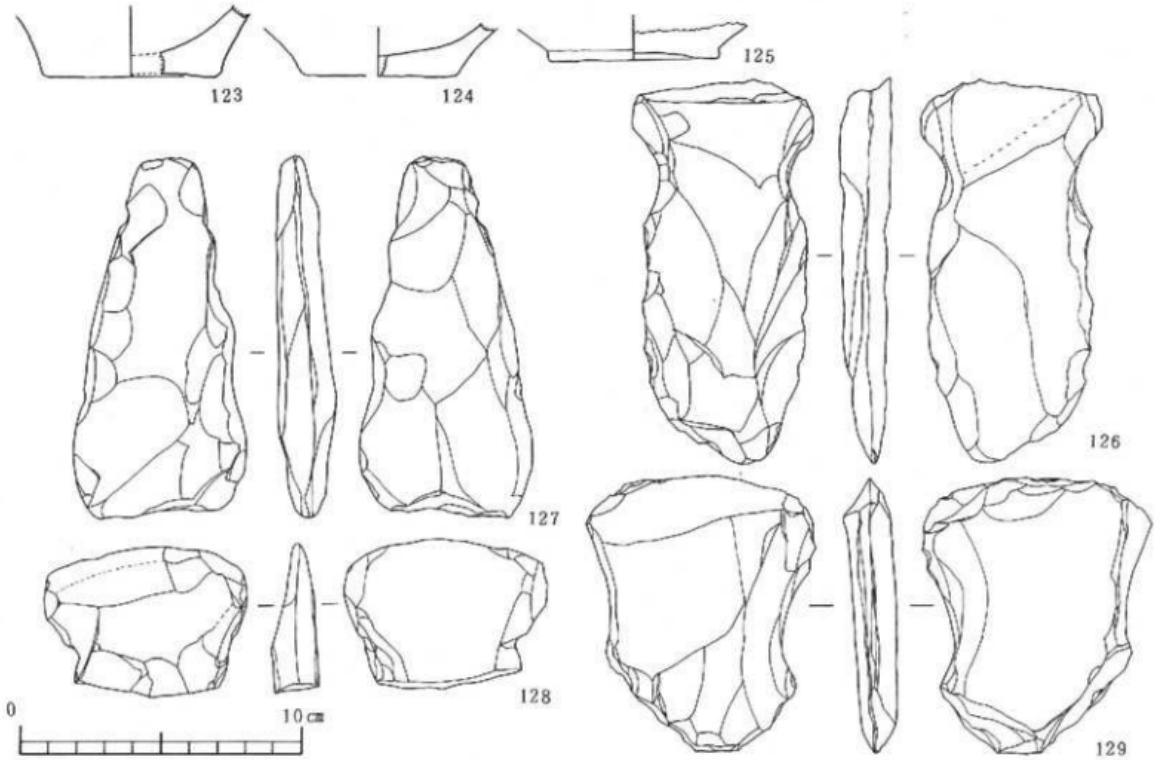
第17図 第7トレンチの出土遺物①



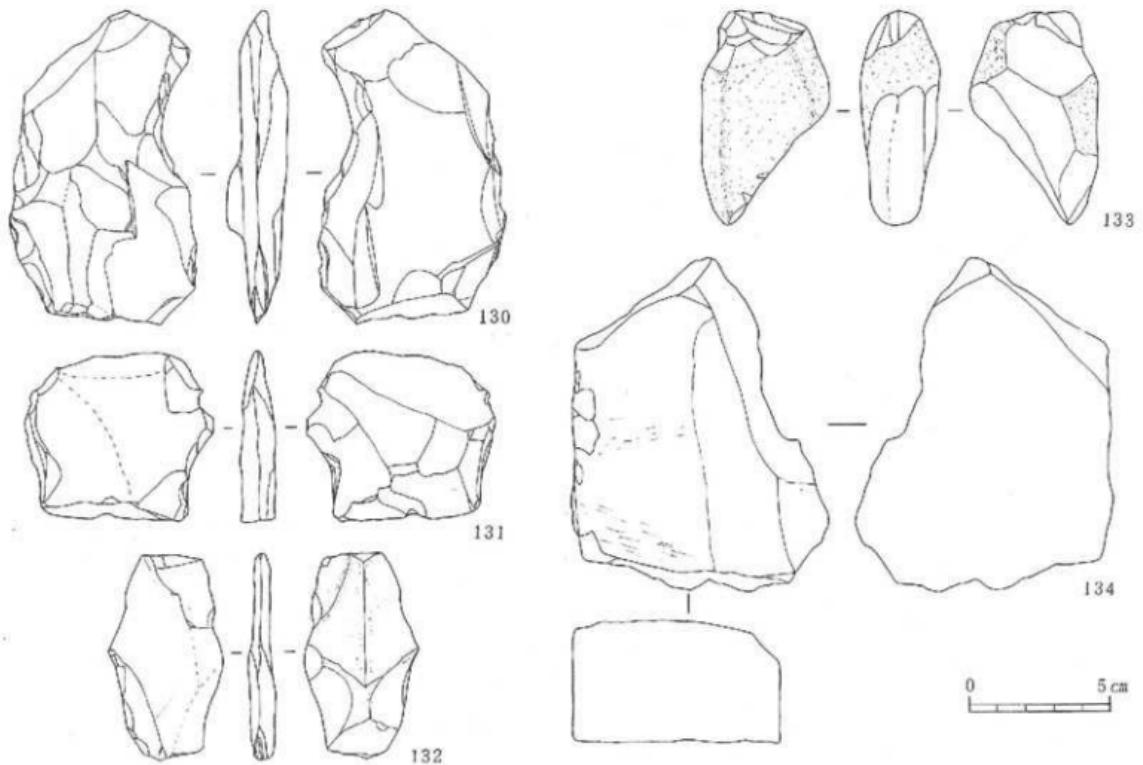
第18図 第7トレンチの出土遺物②



第19図 第7トレンチの出土遺物③



第20図 第7トレンチの出土遺物④



第21図 第7トレンチの出土遺物⑤

第22図 第7トレンチの出土遺物⑥



きである。色調は茶褐色である。焼成は良好である。胎土に多く石英砂を含む。078は壺形土器である。胴部から頸部にかけ内傾していく器形である。頸部から胴部にかけ斜状の三条の浅い沈線を施して、区画するように二条の浅い沈線を施している。器面は籠磨きを施している。色調は明褐色で、焼成は普通である。胎土に砂粒を含む。079は壺形土器の頸部附近である。頸部から口縁部へ向かってしまり、口縁端部で外反する器形と思われる。頸部に凸帯を施している。器面は籠磨き状である。色調は明褐色で、焼成は普通である。胎土に石英砂を含む。080～082は壺形土器の口縁部である。口縁部が「く」の字状になり、口縁端部は丸味をもつ。081は内側にやや張り出す器形である。色調は明黄褐色で、器面調整は横位の籠調整である。080は籠磨きである。焼成は良好である。胎土に細い砂粒を含む。083、084は壺形土器の底部である。円盤貼り付けにより平底を程している。083は器面を籠磨きしている。色調は褐色で、焼成はよくない。胎土にやや大きめの砂粒を含む。084はていねいに籠調整しており、色調は黄褐色である。焼成は普通であり、胎土に細い砂粒を含む。085・086は壺形土器の底部で、平底をなす。器面は籠調整をし、色調は黄褐色である。焼成はよくない。胎土に石英粒を多く含む。

縄文土器 第18、19、20図(087～125)、第22図(136～140)

087は深鉢形土器である。肩部が屈折し、底部に向かってほぼ直線化する。口縁端部外側と肩部に断面三角形の凸帯をめぐらし、キザミを施している。調整は口縁部と肩部下の一部に横位の籠ナデが見られ、胴部から底部にかけて縦位の籠ナデである。また内側は横位の籠ナデ調整である。色調は暗褐色が主体であり、焼成は普通である。胎土に細い砂粒を含む。088から095は深鉢形土器の口縁部である。口縁端部外側に凸端をめぐらしキザミを施すものと口縁端部下に凸帯をめぐらしキザミを施すものがある。094は大きめのキザミである。口縁端部は丸味をおびているが082はやや先細りである。調整は横位の籠ナデ調整である。色調は褐色で焼成は普通である。胎土に石英砂等を含む。096から103は肩部附近である。肩部の屈折が逆「く」の字状になり102・103とやや内曲するものである。096から101は肩部に凸帯をめぐらし、押捺キザミを施している。102・103は肩部にそのままキザミを施している。調整は横位の籠ナデ調整である。色調は096・098・101は褐色で、その他は明褐色である。焼成は普通で、胎土に石英砂等を含む。104は、深鉢形土器の口縁部である。口縁部の直径は34cmである。肩部がやや屈折する器形をなし、口縁端部の外側と肩部に凸帯をめぐらす。口唇部は平坦面をなす。基本器形を作ったのち、粘土を薄くのばし横位の籠調整で整形している。色調は褐色である。焼成はよくなく、胎土に石英砂を含む。105は口縁部である。口縁部に孤伏の凸帯を施している。色調は暗褐色で、焼成は良好である。胎土に石英砂を含む。106は黒色研磨土器の口縁部である。器形は浅鉢形と思われる。口縁部下の外側に凸帯を施している。器面は内外面とも横位に籠調整をしている。色調は黒色で、焼成は良好である。胎土に細い砂粒が含まれる。107・108は深鉢形土器の肩部であ

る。ほぼ直線的な底部への移行で器形をなすと思われる。凸帯をめぐらし、キザミを施している。色調は暗茶褐色で、焼成は普通である。胎土は石英砂を含む。109は壺形土器の口縁部である。肩部附近より若干外反する器形である。口縁端部の外側や肩部に凸帯をめぐらし、押捺キザミを施している。器面の調整は口縁部に横位の箇調整をし、肩部下は縦位の箇調整をしている。色調は褐色で、焼成は普通である。胎土に石英砂を多く含む。110・111は壺形土器の肩部附近で、肩部から底部にかけ直線的な器形となる。肩部には凸帯をめぐらしている。調整は横位の箇調整である。色調は暗褐色である。焼成は普通で、胎土に細い砂粒が含まれる。112・113は組織痕土器である。両方も器底であり、112は徑糸間隔は2cm以上であり、113は0.3cmである。色調は赤褐色で、焼成は普通である。胎土に砂粒を含む。114は浅鉢形土器で口縁部が外反し、口縁端部の外側に一条の沈線を施している。器面は研磨方法をとっている。色調は褐色であり、焼成は普通である。胎土に石英砂を含む。115は小型の壺形土器と思われる。ほぼ直行する形で口縁部までなし、口縁端部の外側やその下に三角凸帯をめぐらし、その下に山形状の二条の沈線を斜状に施している。非常に薄手の土器である。器面は研磨されている。色調は褐色で、焼成は非常によい。胎土に細い砂粒を含む。116は口縁端部の外側に粘土貼り付けをし、キザミを施している。器面は雑に調整してある。色調は灰褐色で、焼成は普通である。胎土に石英砂を含む。120を除いては、117～122は壺形土器の底部である。119・121は底部端にかけ直線的になっている。その他は底部端が外に若干出る。円盤状の貼り付けが顕著に見られるのは117・119である。その他は粘土帶を甌の底部に施し、それを平底に調整している。117は底に葉脈圧痕が見られる。色調は赤褐色である。焼成はよくない。胎土に砂粒を含む。120は鉢形土器の底部と思われる。底部より口縁にかけ開くかたちをとる。内外面とも磨きされている。色調は褐色である。焼成は良好で、胎土に石英砂を含む。123～125は壺形土器の底部と思われる。底部から肩部にかけ大きく開いている。125は黒色研磨で粘土貼り付けの底部をなす。調整は箇による磨きがなされている。底は平底である。色調は123・124は褐色で、125は黒色である。焼成は普通である。125は胎土に細い砂粒を含む。136～140は6肩出土遺物である。136は内彎する口縁部である。口縁端部内側に粘土帶を貼り付け、口肩部とともに整形してある。内側は貝殻条痕を横位に荒く施し、外側は口縁端部を横位に条痕したのち箇で調整している。その下部は斜状に貝殻条痕を施している。器面にはスス痕が付着している。色調は暗褐色で焼成はよくない。胎土に石英砂を含む。137・138は肩部と思われる。137は外側に縦位の貝殻条痕を施し、内側に横位の貝殻条痕を施している。色調は明褐色で、焼成は普通である。138は外側に横位の貝殻条痕を施し、縦位にナデ調整してある。内側は斜状に貝殻条痕を施している。色調は赤褐色で、焼成は普通である。胎土に石英砂を含む。139・140は底部である。139は貼り付け底部をなし、肩部との取り付け部の内側は貝殻による調整である。底は平底をなす。色調は赤褐色で、焼成は普通である。胎土に石英砂を含む。140は平底をなし、調整は横位の箇ナデである。色調は明褐色で、焼成は普通である。胎土に石英砂を含む。

石器 第20, 21, 22図 (126~135)

127~131は打製石斧である。127は石材が粘板岩質であり、長さ12.9cm・幅6.2cm・厚さ2.0cm・重さ181gである。刃部先端が剥脱している。128は長さ13.6cm・幅6.5cm・厚さ1.8cm・重さが191gである。石器上部に抉りが両側に施されている。石材は粘板岩質である。128は石器上部の抉られている部分より刃部にかけ欠損している。石材は粘板岩質である。129は石材が玄武岩質である。抉り部より刃部にかけて欠損している。抉り部の幅が6.3cmで大形の石斧である。130は石器上部と刃部が欠損している。片側に抉りが施されている。石材は粘板岩質である。131は抉り部から刃部にかけて欠損している。石材は安山岩質である。132は扁平状に加工している小形の石器と思われる。表面が風化している。縦剥ぎの方法をとっている。石材は安山岩質である。133は安山岩質の楕円雕を加工したもので、石器上部より欠損している。表面は磨製化されている。敲石と思われる。134は石皿と思われる。石材は安山岩である。a面が若干磨かれている。135は石皿である。石材は安山岩である。a面に使用痕が見られる。

第8トレンチ (小字名 西原迫)

この箇所は西原迫では標高の高い位置にあり約45mである。面積は4×4mであったが遺跡確認のために東に12m拡張した。層位は、ほぼ第7トレンチと同様であるが、トレンチ西側では、第8層が表層下に見られ、東側では3m掘り下げても確認できなかった。西側から東側にかけてかなりの傾斜がある。西原迫の西側は、平坦になっているが旧地形では、丘陵部にあたるのではないかと思える。

遺物は、第4層で弥生土器の壺形土器・壺形土器の土器片が出土し、第5層では、浅鉢・深鉢の土器片が出土し、石器は、第4層で石鎚2点出土したうち1点は磨製の石鎚である。石斧は第4層で1点、第5層で2点打製石斧が出土している。

成川式土器 第23図 (141~144)

141・142は鉢型土器の口縁部である。141は復元口径約16cmで内外面とも刷毛によるていねいな整形がなされている。色調は淡茶褐色を呈しており、胎土、焼成とも良好である。142は復元口径約16cmである。外面はヘラによる縦位の整形、内面はヘラによる横位の整形がなされている。色調は黄褐色で、胎土、焼成とも良好である。143は手捏土器である。色調は淡褐色を呈しており、胎土・焼成とも良好である。144は壺型土器の脚部である。内面・外面ともヘラによる調整がなされている。色調は黄褐色で、胎土・焼成とも良好である。

弥生土器 第23図 (145~155)

145~149は壺形土器と考えられる。145~147は断面がほぼ三角形の突帯を貼りつけ、その頂部にヘラ状のもので施したとみられる刻み目をもつ。145・146は内外面とも刷毛による整形がなされており、147はヘラによる整形を行っている。色調はいずれも淡赤褐色を呈しており、胎土・焼成ともいずれも良好である。148・149は調整がやや難にな

されており、胎土もややあらい。色調は黄褐色である。150・155は鉢形土器の底部と考えられる。色調は淡赤褐色で胎土・焼成とも良好である。151・154は壺形土器の底部である。色調は黄褐色で胎土・焼成とも良好である。152・153は高坏である。环部と脚部の接合部分に152は一条の、153は二条の断面三角形の突帯をめぐらしている。調整はヘラでていねいになされている。色調は赤褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

縄文土器 第24, 25, 26, 27図(156~220)

156~189は口縁部または胴部に刻み目突帯をもつ壺形土器である。その刻み目は指頭によると思われるもの(156~170, 181~184)とヘラ状のものを用いたもの(171~180, 185~189)が観察される。突帯は口縁端部につくもの(157~159, 161, 166, 173, 178, 186)と口縁端部より下るもの(156, 163, 167, 168, 175, 177, 179, 182~185)がそのほとんどであるが、162, 164のように突帯が口唇部より高くなったものもある。口縁部が内傾し胴部が逆「く」の字状に反転しその反転部に刻み目突帯をつけるもの(156, 170)がそのほとんどであると考えられるが、181のように胴部は反転せずに、刻み目突帯もつかないと考えられるものもある。

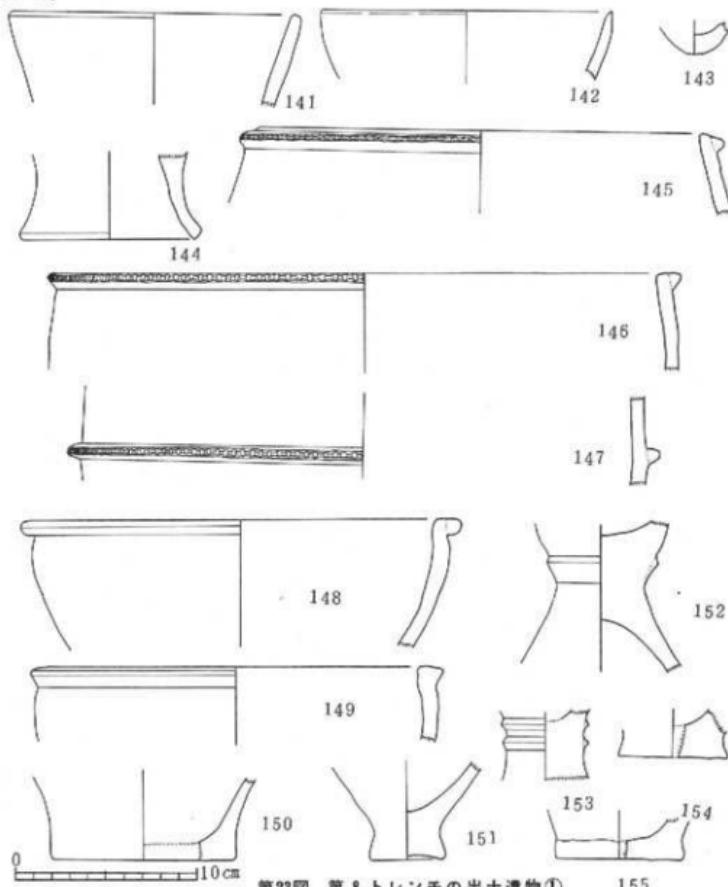
器面調整はヘラによるものが大多数を占めるが、163, 165, 183は刷毛によるとみられる調整がなされている。色調は全体的に褐色、もしくは黄褐色を呈している。胎土・焼成とともに全体的に良好である。156, 158, 165, 166, 169, 170, 172, 184はススの付着がみられる。

190~201は鉢形土器である。なで調整が行なわれている研磨土器である。190, 191, 193, 194, 195, 197, 198, 199は口縁部に突帯をもつもので、197, 198は胴部にも突帯をもつ。口縁部は外傾するもの(190, 197, 198), 内傾するもの(193~195), 内傾しながらわずかに外反するもの(191, 199)がある。色調はそのほとんどが黄褐色を呈している。胎土・焼成ともに良好である。192, 196, 200, 201は浅鉢である。192は口縁部が外傾し、胴部は逆「く」の字状で内外に稜をもつ、196も192と同様口縁部は逆「く」の字状で内面に稜をもち、外面は沈線を巡らしている。200は口縁部が外反し、胴部に沈線を巡らしている。201は浅鉢の胴部である。逆「く」の字状であり外面に沈線をもつ。口縁部との接合面で粘土がはずれたものと考えられ、口縁部はその程度はわからないが外傾するのではないかと考えられる。色調は内外面とも褐色で胎土・焼成とともに良好である。202は壺形土器である。頸部から胴部に移行する部分にわずかではあるが段をもつものである。外面はヘラによるなで調整を行なっており、黒褐色を呈している。内面は黄褐色を呈している。焼成は良好である。

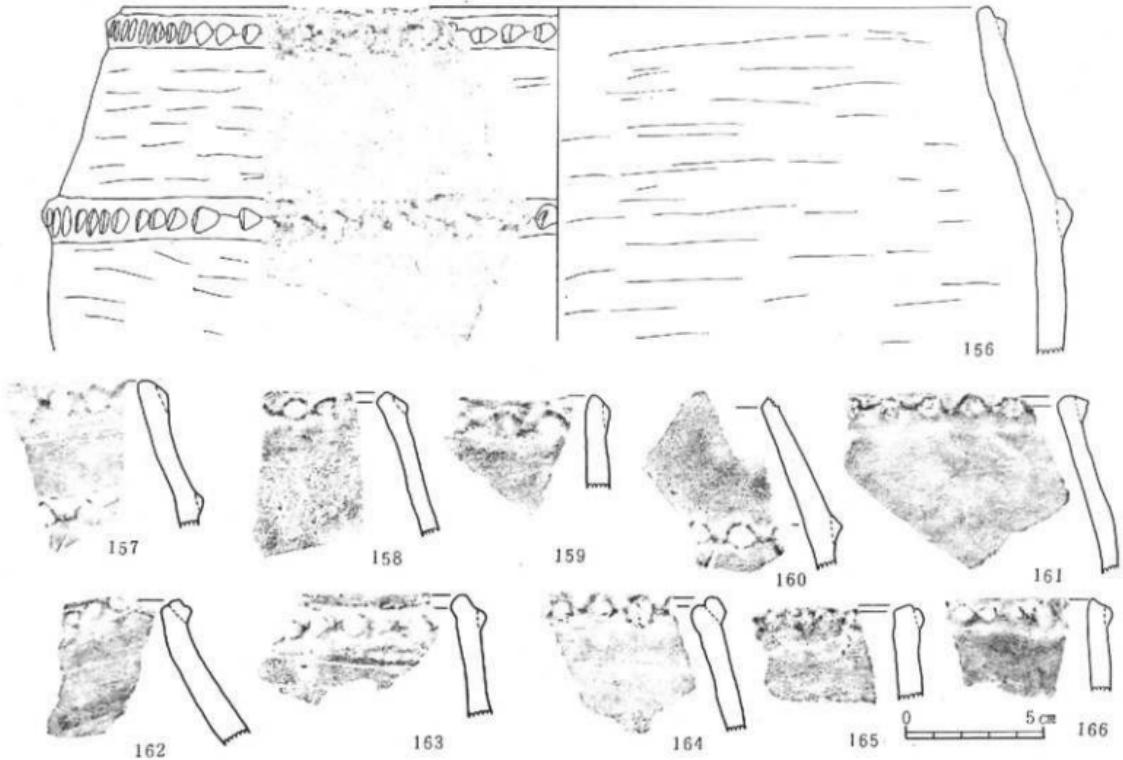
203, 206, 208は壺形土器の底部と考えられる。206は粘土の接合部分よりはずれたものである。色調はいずれも黄褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。204, 205, 207, 209は壺形土器の底部であると考えられる。色調はいずれも褐色もしくは黄褐色を

呈しており胎土、焼成とも良好である。

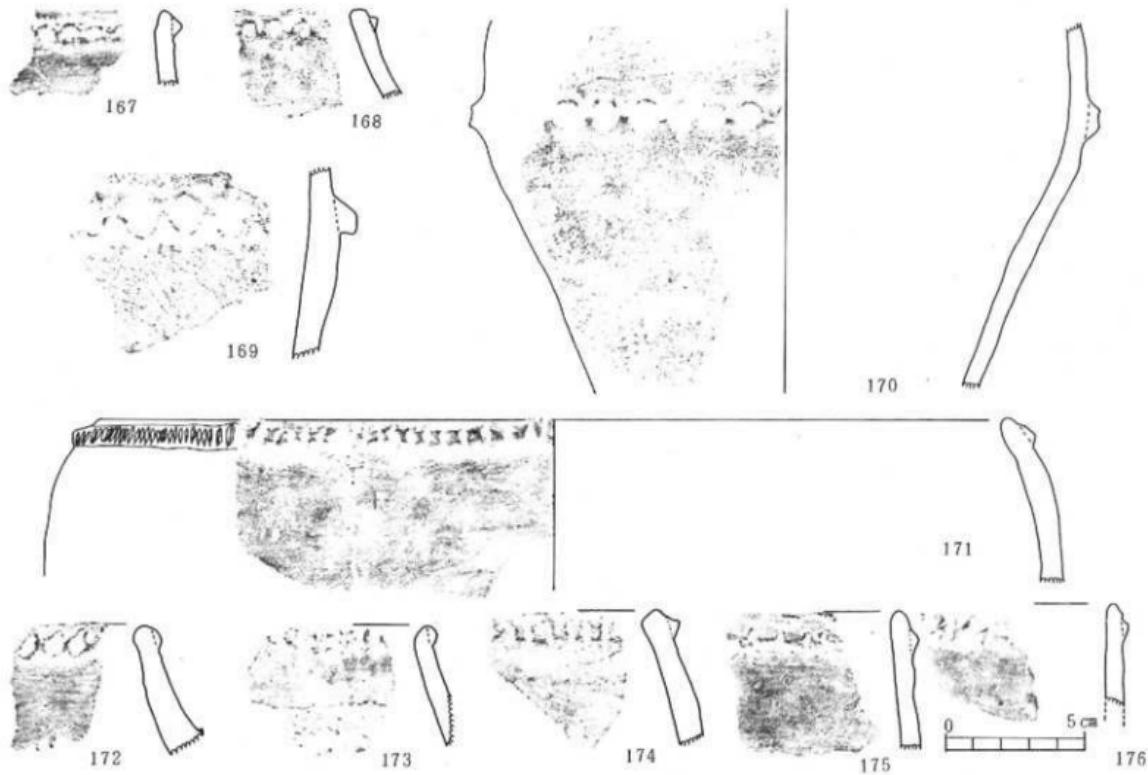
210～220は席目压痕をもつ土器である。席目の文様をみると210～215、217、のように径糸の間隔の広いもの(210は約1.8cm、214は1.1cm～1.2cm)と216,218～220のように狭いもの(216は0.6cm～0.8cm、220は0.3cm～0.4cm)の2つの文様がみられる。213と214は同一個体とみられ径糸は2本を撲って1本にして用いている。内面は黒色の研磨である。色調はいずれも黄褐色もしくは淡赤褐色を呈している。



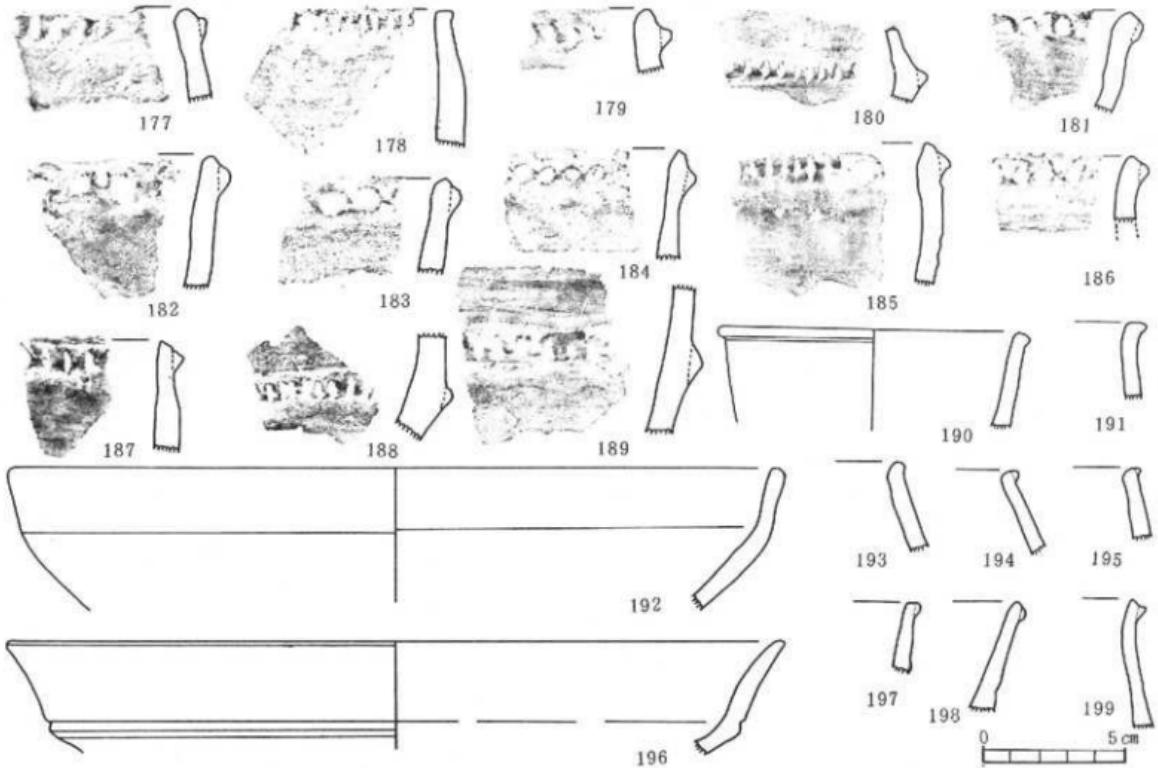
第23図 第8トレンチの出土遺物①



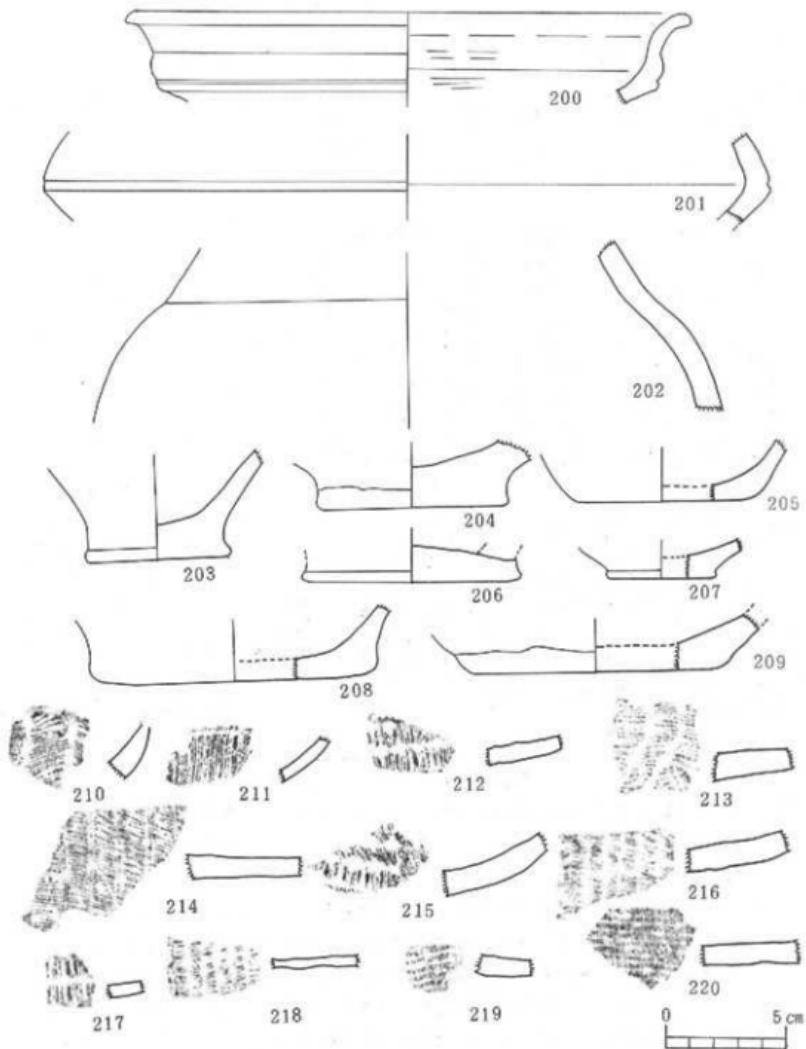
第24図 第8トレンチの出土遺物②



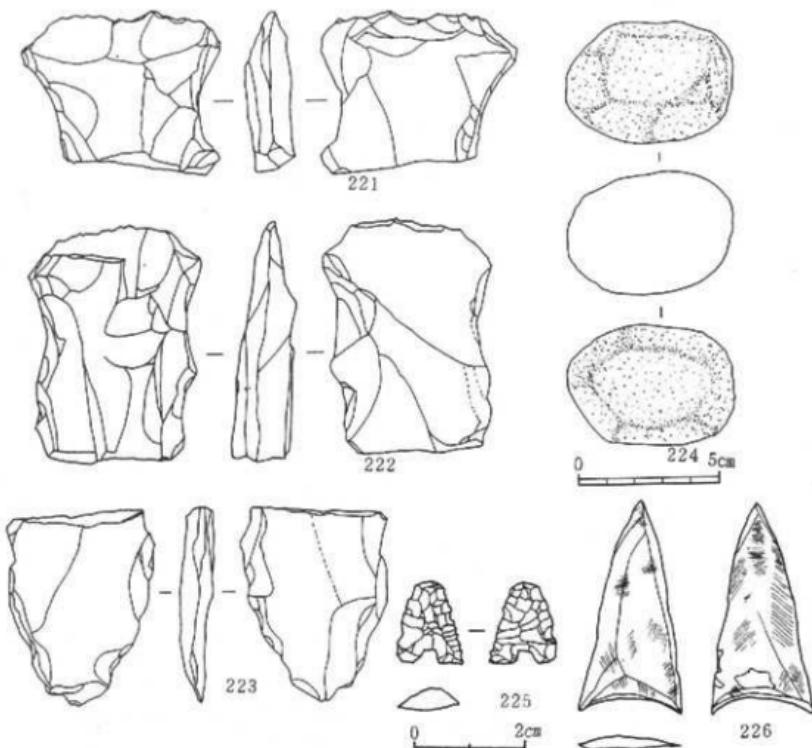
第25図 第8トレンチの出土遺物③



第26図 第8トレンチの出土遺物④



第27図 第8トレンチの出土遺物⑤



第28図 第8トレンチの出土遺物⑥

胎土・焼成とも良好である。この席目圧痕のついた土器は図のように底部、もしくは底部近くの部分と考えられる。

石器 第28図 (221~226)

8トレンチより石器は6点出土している。221~223は粘板岩をその素材とした石斧である。221は基部に抉りをもつものであるが刃部を欠損しているのでその全体の形は不明である。222も刃部を欠損している。基部には221ほどではないがわずかなえぐりをもっている。223は刃部であるが基部を欠損しているためえぐりをもつかどうかは明らかでない。224は安山岩を素材とする磨石である。225は黒曜石を素材とした石鎌である。先端を一部欠損している。基部には抉りが入る。重さは0.5gである。226は粘板岩を素材とした磨製石鎌である。基部に抉りをもつ。両面とも研磨されているが一部削離面がみられる部分もある。重さは1.5gである。

第9トレンチ（小字名 西原追）

西原追のほぼ中央部にあり、鳥山部落と渡瀬部落とを結ぶ道路沿いに位置する。層位は、表層下に第8層が堆積しており、1.3m掘り下げる同層が厚く堆積していた。

遺物の出土は表層からも見られなかった。

第10トレンチ（小字名 中追）

中追の南西部に位置するところで、標高48mの東追から西に延びる傾斜地の末端部にあたる。層位は、基本層位とほぼ同様で表層下に第8層が厚く堆積している。入戸の風化層まで3.6mを計る。面積は4×4mである。

遺物は、第7層中に黒曜石の剣片・チャート質の剣片・安山岩の円礫の出土が見られた。

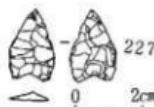
第12トレンチ（小字名 西原道畠）

この箇所は、西原道畠のほぼ中央にあたり、十石平からゆるやかに傾斜する中央にあたる。面積は4×4mである。層位は、表層下に第5層があり、その下は小牧火山灰層が厚く堆積している。入戸の風化層までは3.6mを計る。

遺物は、第12層中にタンパク石の石鐵1点、同質の剣片・碎片が数点出土し、安山岩質の亞円礫1点も出土している。

石器 第29図(227)

227は五角形を基本としたかたちをとり、基部に抉りを施している。剣離方向が一定ではない。長さ2.2cm、幅1.2cm、厚さ0.2cm、重さ0.7gの石鐵である。石材はタンパク石である。



第13トレンチ（小字名 西原）

第29図 第12トレンチの出土遺物

西原の西側にあたり、十石平から傾斜をなしている中腹に位置する。面積は4×4mである。層位は、表層下に第8層が薄く堆積しており、第8層までは1.8mの深さである。開墾時の削平により第8層の一部から上層はすでになくなっている。

遺物の出土は見られなかった。

第14トレンチ（小字名 中追）

この箇所は、中追の北東に位置し第10トレンチからは、ほぼ北に20m離れている。面積は4×4mである。層位は表層下に第5層が堆積しており、第15層の入戸火砕流の風化まで確認した。第15層までは基本層位と同様で、その深さまでは2.9mである。

遺物の出土は見られなかった。

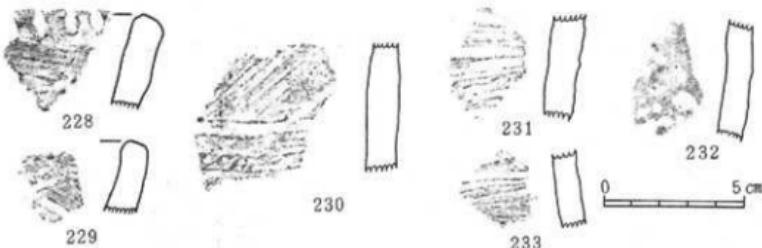
第16トレンチ (小字名 烏添)

この箇所は、烏添で一番高い標高64・52mの位置にある。十石平の丘陵部の西側で、北側は急斜崖となり開析谷に続く。東側は傾斜をなして東迫に続く。層位は表層下に第7層が堆積し、それから下の層は基本層位と同様である。第15層の入戸火砕流の風化層まで確認したが、その深さは3.3mであった。各層は西側に若干の傾斜をなして堆積している。

遺物の出土は、第12層に貝殻条痕を荒く施した土器が出土した。

縄文土器 第30図 (228~233)

228~232は貝殻条痕を器面外側に施している。色調は赤褐色で、胎土に石英砂を含み、やや雜なつくりである。228は口縁端部の外側に押捺キザミを施している。外側を横位の貝殻条痕を施し、内側は籠による調整である。229は口縁部である。斜状に貝殻条痕を施す。230も斜状の条痕を施したのち横位の条痕を施している。内側も横位の貝殻条痕を施している。231, 232は横位の貝殻条痕を施し、内側は籠による調整である。233は磨滅をうけており、器面に刺突文状の凹と思われるものが施してある。色調は赤褐色で、焼成はよくなない。胎土に砂粒を含む。



第30図 第16トレンチの出土遺物

第18トレンチ (小字名 東迫)

池平と東迫との境にあり、池平の東側にあたる。北側は岩本部落に続く、開析谷になっている。また、十石部落と鳥山部落とを結ぶ農道沿いに位置する。面積は3×3mである。層位は、表層下に第8層が厚く堆積しており、2.5m掘り下げても同層であった。

遺物の出土は見られなかった。

第20トレンチ (小字名 鳥山)

池平との境にあたり、鳥山の北東に位置する。北側は、急斜崖になっており、調査地域の北西にあたる。標高は約55mであり、南にゆるやかに傾斜する。面積は4×4mである。層位は表層下に第8層が堆積しており、比較的浅い位置で入戸の風化層が見られた。

遺物の出土は見られなかった。

第21トレンチ（小字名 早馬追）

この箇所は、早馬追の南側にあたり、標高45mの丘陵の中腹にあたる。第1・2トレンチのほぼ南に位置する。面積4×4mである。層位は、表層下は第5層よりなっており、第13層までは、2.4mを計る。第8層よりは基本層位と同一である。

遺物の出土は見られなかった。

第22トレンチ（小字名 早馬追）

早馬追の北側に位置する。西原の丘陵部より西に傾斜する裾野にあたる。面積は4×4mである。層位は、表層下に第2・4・5層と堆積しており、そこまでの深さは1.0mである。

遺物は第4層中に弥生土器片の散布が見られ、表層下から50cmの位置での出土状況である。

第23トレンチ（小字名 早馬追）

本トレンチは小字・早馬追の北端部に4×4mで入れた。この地点は小字早馬追頭。西原道畠が周囲にある標高52.65mの台地末端にあたる。周囲は開墾により段々畠をなした地形で本トレンチも北側を削って畠をしている。本畠の北部は表面直下第8層の池田火碎流がのぞき、本トレンチでは第5層と8層が検出された。第5層の上面に弥生前期の遺物が出土したため南に2m拡張した。その拡張部にも遺物の出土が見られたため遺跡であることが確認された。なお本トレンチ附近は圃場整備事業において幹線道路部にあたるため約300m²に拡張して記録保存にあたった。

第31図は23トレンチ拡張図である。南北に24m東西に16m拡張し、西からA・B・C・D、北から1・2・3・4・5・6のグリッドになる。当初のトレンチでは第4層に遺物が若干みられ拡張した結果、南側に多量の遺物が出土した。また、遺構は検出されなかった。

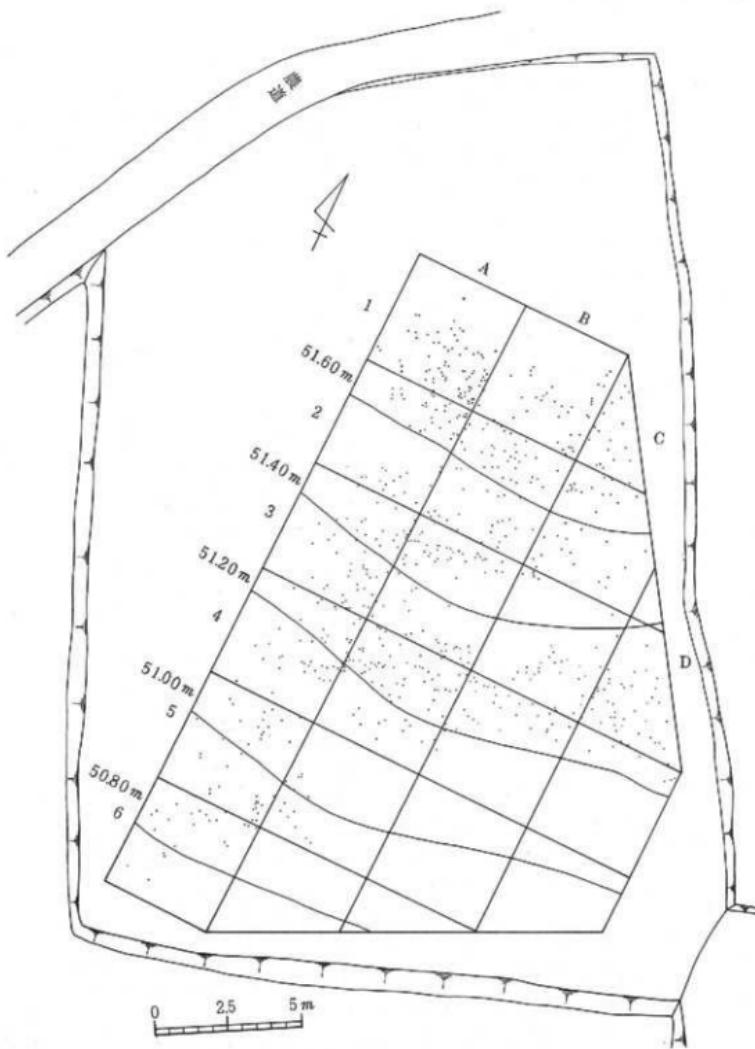
出土遺物としては壺形土器・壺形土器・石器がある。時期としては前期後葉より中期中葉までのものが主である。ここではこれらをI類・II類・III類と3タイプに分類した。

壺形土器第32、33、34、35図(234～270、285～294)

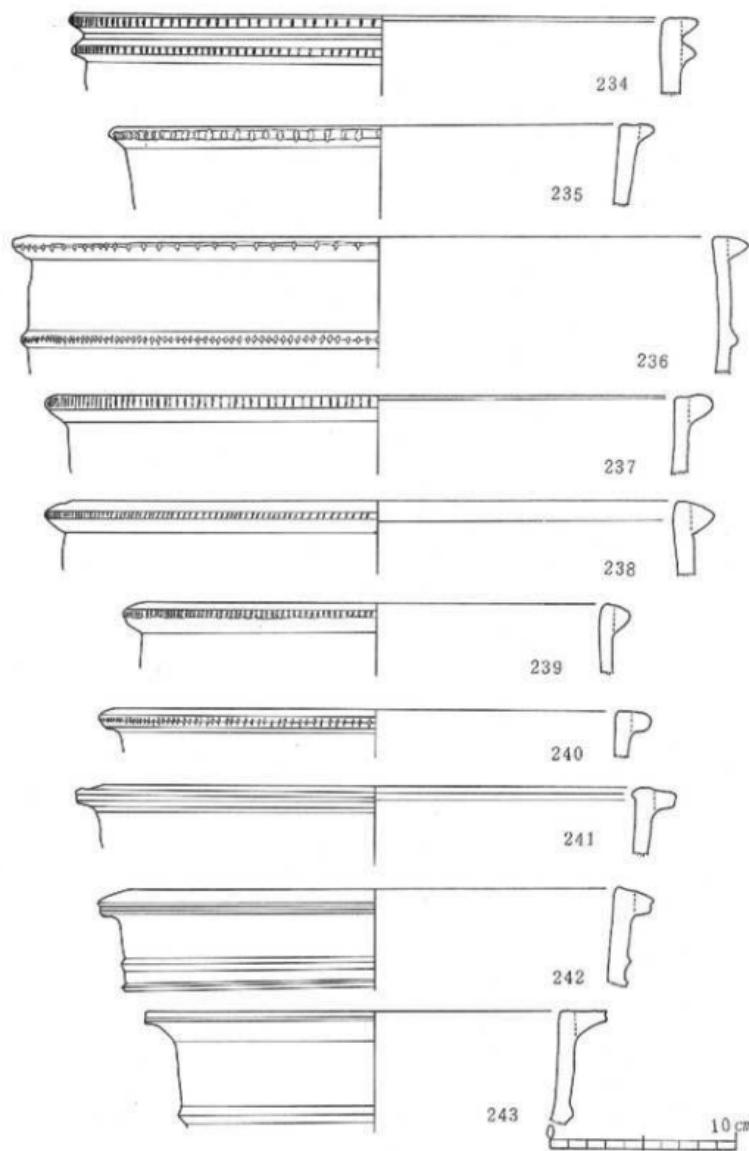
I類は234～240、244～254である。この土器は断面三角突帯をもち刻み目を施す亀ノ甲タイプと思われる。234は黒褐色を呈し胎土焼成ともに良い。口唇部の突帯と下の突帯との間が狭いのが特徴である。235～240までは口縁部が直口するものである。

236は口縁部の突帯と下の突帯との間に刷毛目調整痕がみられるのが特徴である。全般的にこれらは黒褐色を呈し胎土焼成ともに良い。244～254の土器は口縁部が内傾するものである。246と248は口縁部突帯下に縦位に、255は横位に刷毛目調整痕がみられる。他は撫調整が主体である。これらも胎土焼成ともによく黒褐色から明茶褐色の色調を呈する。

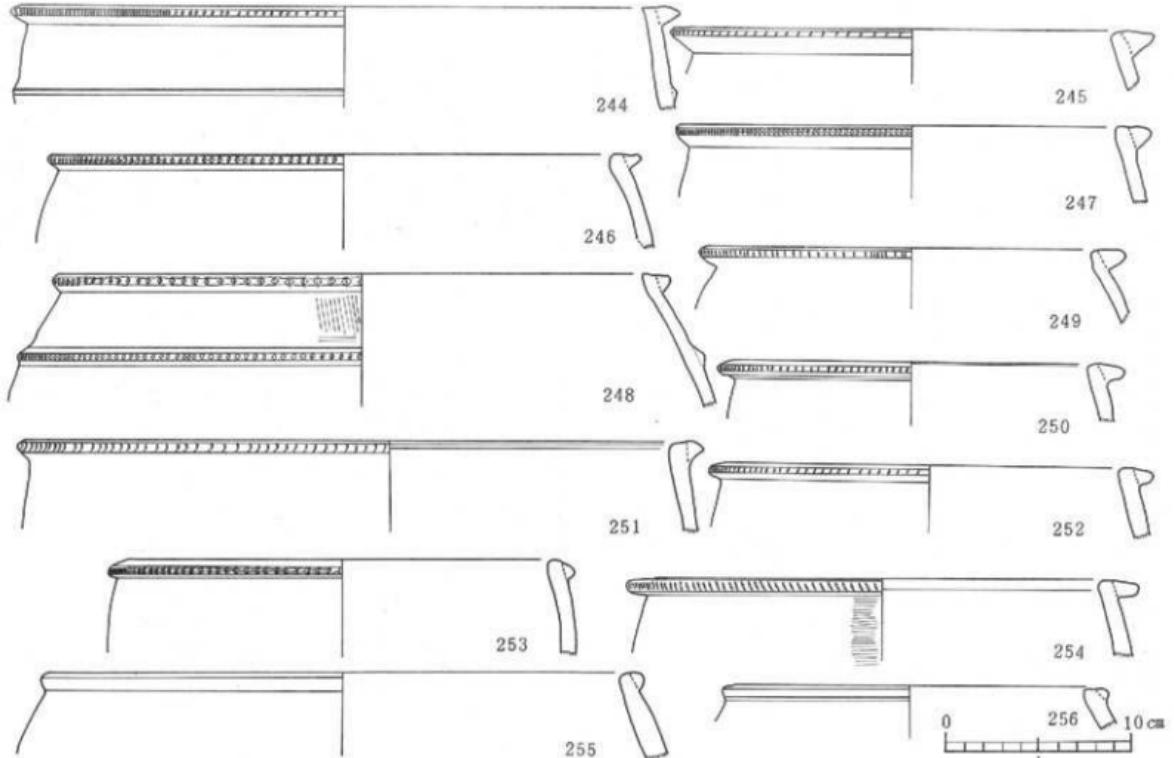
II類は255、256、258、259、261、263、264の土器である。このタイ



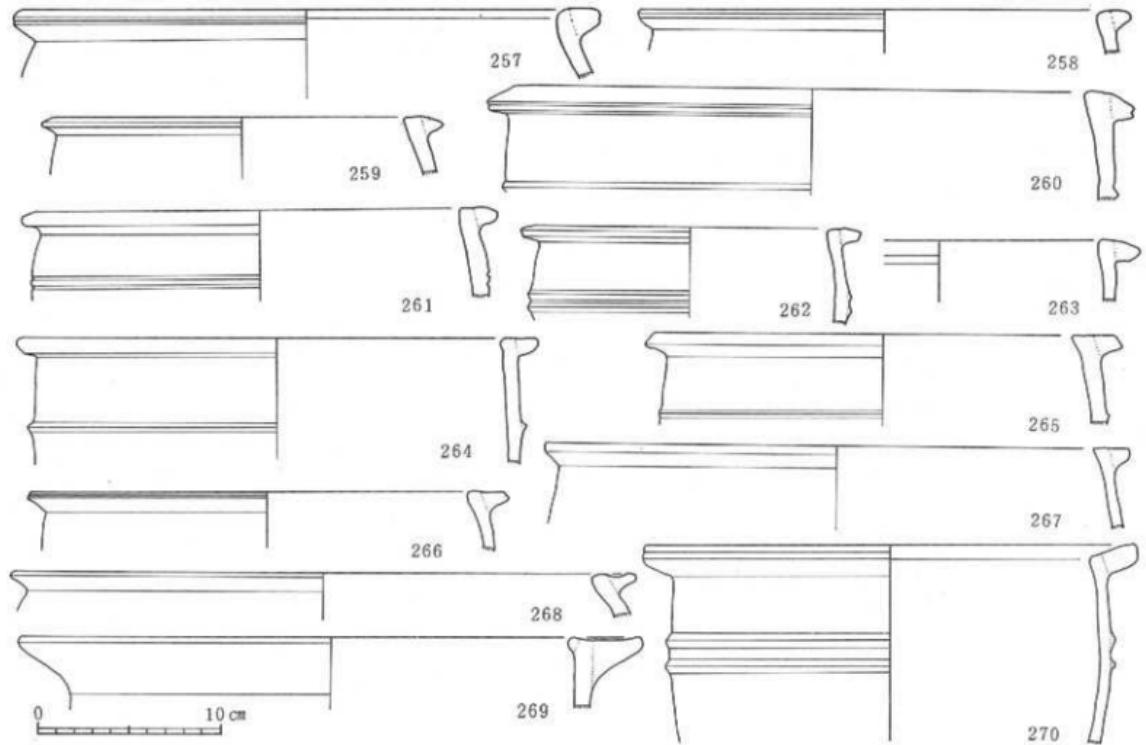
第31図 第23トレンチ4層出土状況



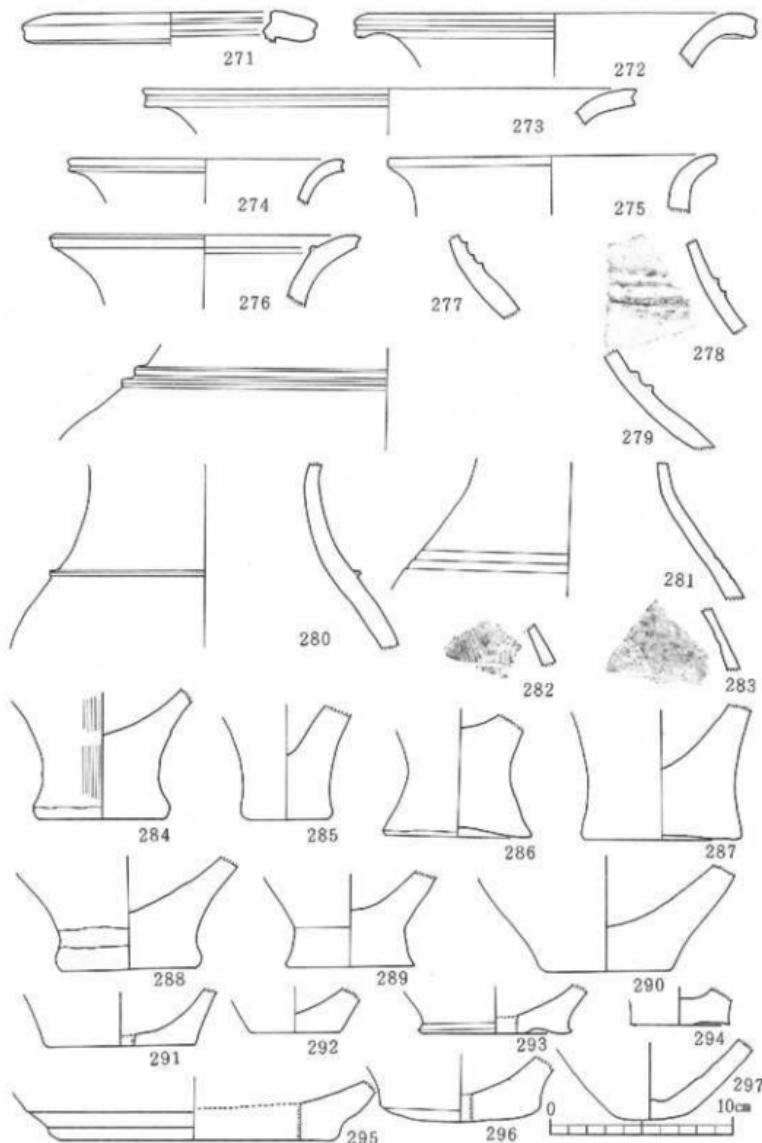
第32図 第23トレンチの出土遺物①



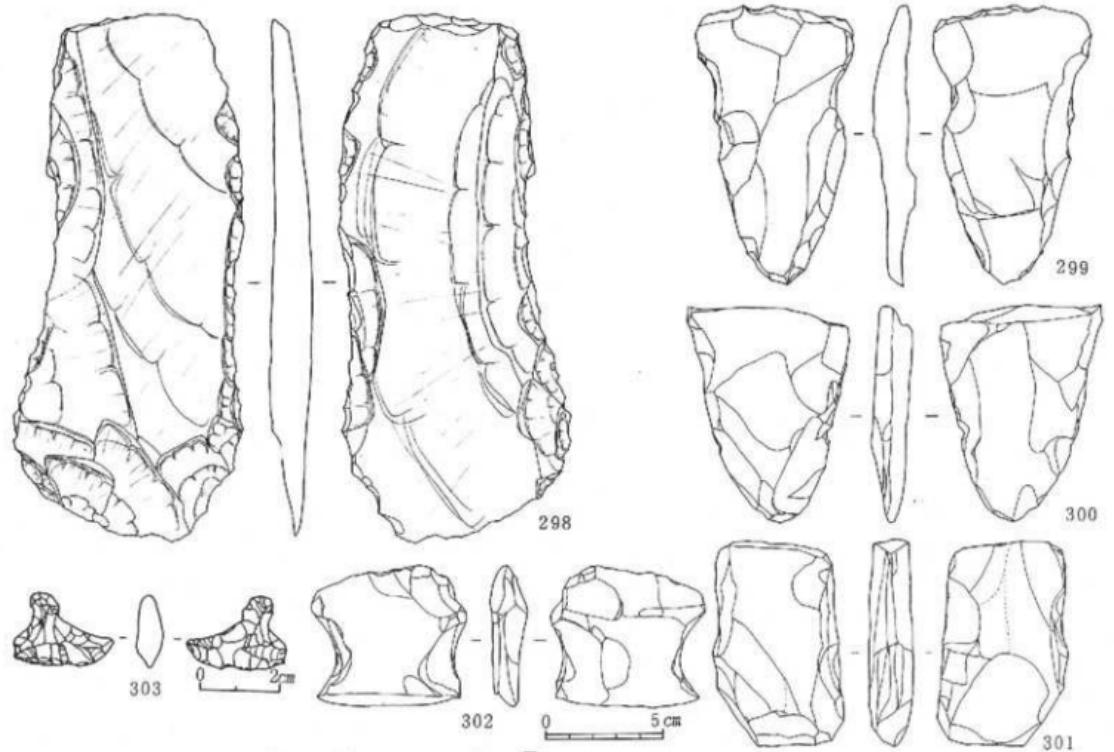
第33図 第23トレンチの出土遺物②



第34図 第23トレンチの出土遺物⑤



第35図 第23トレンチの出土遺物④



第36図 第23トレンチの出土遺物⑤

は断面三角突帯をもちながらも刻み目を施さない。255, 256は口縁部が内傾するもので三角突帯は小さい。色調は茶褐色で胎土焼成とも良い。258, 259, 261, 263, 264は口縁部の三角突帯が大きく刻み目をもたない。258は口縁部の突帯下に縦位の刷毛目調整痕をもつ。261は肩部の突帯の代りに二条の沈線をもっている。264は肩部に一条の三角断面突帯をもち窓調整と撫調整で器面をととのえている。これらの土器は黒褐色から茶褐色の色調を呈し胎土焼成ともに良い。

III類は241, 242, 243, 257, 260, 262, 265, 266~270までである。このタイプの土器は逆L字形口縁をもち端部が角張るか又は溝をもつものである。口縁部の突帯が長く269, 270をのぞけば水平状か下りぎみの口縁部をなす。242, 262, 270など胴部に2本の突帯をもつものが多い。全体的に窓調整と撫調整が主であり胎土・焼成共によく、黒褐色から茶褐色を呈する。

壺形土器（第35図 271~283, 295~297）

I類の土器は275と281の2つである。275は暗褐色を呈し外反する口縁部である。281は三条の沈線をもち暗褐色を呈した頸部から胴部にかけての土器である。

II類の土器は272, 273, 274, 276, 277, 278, 279, 280である。外反し端部に浅い溝をもつ、口縁をもち胴部に凸帶を施す土器である。276は口縁内部に1条の凸帶がみられ、278は凸帶部に竹管状の文様を施している。また凸帶は280が一条・278・279が二条・277は三条である。

III類の土器は271である。厚い口縁をもち若干下りぎみの口縁部である。茶褐色を呈し焼成・胎土共に良い。

底部（第35図 284~297）

底部は分類がむつかしい。壺形土器は底の薄いものと厚いものとがある。前者は平底であるが後者は若干上げ底のものもある。壺形土器は295・256・297の3個である。295は平底で他は丸底・凸底である。

石器（第36図 298~303）

石器は大形・中形・小形に分類できる。

大形は298である。長さ22.5cm, 最大幅10cm, 最大厚2cmで長方形をした扁平打製石器である。刃部は片刃で半円状をし、広がっている。刃部以外は刃つぶしがみられる。石材は堆積岩の一種で鉄分を多く含んだ粘板岩と思われる。器面には鉄分質が多くみられる。器形・大きさからみてこれは鎌と思われる。

中形は299・300・302である。扁形打製石器で刃部は三角に尖がり両刃である。柄付部に両抉りがみられる。石材は粘板岩とみられる。

小形は303である。玉髓質の石匙である。全般的に磨滅がみられる。最大2cmの大きさである。

その他として301がある。粘板岩質の石材で扁平石器である。これは途中より折れている

ため形態は不明である。

第24トレンチ（小字名 西原）

十石平の丘陵部の西側中腹に位置する。面積は $4 \times 4\text{ m}$ である。層位は、深さ 2.2 m で第14層にあたる。第10層以下は基本層位と同様であるが、その上の層は開墾時の耕作あるいは、樹根等で明瞭ではなかった。

遺物は、弥生土器の土器片が少量出土した。

第25トレンチ（小字名 十石平）

今回の調査地域で標高の一一番高い丘陵の東側の中腹に面積 $4 \times 4\text{ m}$ で設定した。丘陵西側部がなだらかな傾斜をなしているのに対して、東側はやや急傾斜している。層位も、表層下は黒褐色土が厚く 1.8 m 掘り下げるも他層は見られなかった。急傾斜面を開墾時に階段状に耕作したために黒褐色土が厚く堆積したのではないかと思はれる。

遺物は、この黒褐色の上面部に成川式の土器片が少数みられた。

第26トレンチ（小字名 十石）

標高 $60\text{ m} \sim 65\text{ m}$ の丘陵から連なる尾根状の台地に位置し、北側は深い開折谷となり、東側はなだらかな傾斜をなして十石部落に続く。このトレンチでの層位は、表層下に第10層があり、約 1.4 m で第15層入戸火砕流の風化層にあたる。面積は $4 \times 4\text{ m}$ で深さは 1.6 m まで掘り下げた。

遺物の出土はなかった。

第27トレンチ（小字名 十石）

この箇所も第26トレンチと同様の尾根状の台地の一角で、小字十石においては一番標高の高い位置にある。層位も前トレンチと同じく表層下に10層があり、その上の層は、開墾時の削平によりなくなっている。第15層までの深さは 1.6 m であり、その層序は第26トレンチと同様である。面積は $4 \times 4\text{ m}$ であり、遺物の出土は見られなかった。

第28トレンチ（小字名 今田平）

調査区の最北部に位置するトレンチで、眼下に岩本部落をのぞみ、十石平から連なる尾根状台地の先端部である。層位は、台地の先端部であるためか、第8層より残っている。

遺物は、第11層より安山岩の剥片、礫があり、土器も磨滅して極小片ではあるが3点出土している。面積は $4 \times 4\text{ m}$ で深さ 2.1 m まで掘り下げて第15層を確認した。

第30トレンチ（小字名 十石）

小字十石の南東部に位置する。尾根状台地から東にゆるやかに傾斜する末端部で、道路

を隔てて、十石部落が点在する。表層下は第10層から堆積しており、比較的浅い位置で入戸火砕流の風化層を確認できた。入戸火砕流の風化層を確認できた。入戸火砕流までの深さは1.6mで、面積は4×4mである。

遺物は第12層に頁岩質の剝片3点、黒曜石の剝片、碎片2点が出土しただけで他には見られなかった。

第31トレンチ（小字名 十石出口）

この箇所は榎木迫頭の台地から北東方向に傾斜する裾野に位置する。小字、足洗山と開析谷により分かれるところである。現地形では、平坦になっているが、旧地形では台地から谷へと傾斜をなす部分ではないかと思われる。そのためか、表土下より1.6mまではほとんど粘質の黒褐色系統である。その下層は第8層である。面積は4×4mである。

遺物は第4層にあたると思われる層より成川式の土器片が十数点出土した。

第32トレンチ（小字名 十石山口）

第31トレンチと同様の地形内に入る箇所で、幾分か開析谷の方向に位置する。層位も、前項と同じく粘質土質の黒褐色土系の土層をなす。面積4×4mである。第8層まで確認するのに2.4mを計る。

遺物は、安山岩質の剝片が数点出土しているが、土器の出土は見られない。

第33トレンチ（小字名 榎木迫）

足洗山と十石出口、榎木迫、立平とを開析する谷につながる階段状の地形をなす位置にある。層位は表層下1.0mで第8層と思える層が確認できた。その下層は、茶褐色の粘質土層で、遺物はこの層より磨滅した小土器片が2点出土した。面積は4×4mである。

開析谷の縁辺部にあたる十石出口、榎木迫の層位は、第8層より上部は非常に基本層序と対比しにくい土質である。

第34トレンチ（小字名 榎木迫）

この箇所は榎木迫では、標高の一番高いところである。標高は約51mである。また、今回の調査地域の最東部に位置し、宮ヶ浜の町をのぞめることができる。面積4×4mである。層位は、表層下に第8層の池田火山関係の噴出物を残位的に見ることができた。入戸の風化層は、表層より1.4mで確認できた。尾根状台地では、各層が薄く堆積している。遺物の出土は見られなかった。

第35トレンチ（小字名 西原追）

この箇所は、第7・8トレンチの遺物の出土状況により、その範囲を確認するために設けた

トレンチである。西原迫の南側で舌状につき出る台地上に位置し、第7トレンチより一段高く標高44.52mの畠地にある。南側は急斜崖となっている。鳥山部落と渡瀬部落とを結ぶ道路沿いにあたる。層位は表層下に第4層が堆積しており、第5・第6層が統いて堆積している。第8層の池田火山噴出物まで確認した。トレンチの北側では第8層が80cmの位置で確認でき、南側にいくにしたがい傾斜をなし、南側では2.2mで確認できた。旧地形はかなりの北側から南側への傾斜になっている。面積は4×12mである。

遺物は、第4層の上部に成川式土器が出土し、下部にいくにつれ弥生土器の出土が多くなった。第5層には縄文時代晚期の土器の出土があり、鉢形土器（深鉢形・浅鉢形土器）壺形土器等が出土した。石器は第5層に打製石斧が1点・石鎚1点が出土している。

成川式土器 第37図（304～310）

304～310は成川式土器である。304・305は高環形土器である。304は肩部で内外面とも段をもち口縁部が大きく外反する。口縁端部は先細りになる。器面は口縁部で刷毛調整し、肩部下では箇ナデ調整である。色調は赤褐色で、焼成は良好である。胎土に石英砂を含む。305は肩部の外側だけが段をもち口縁部で外反する。口縁端部は凸状になる。横位の箇ナデ調整である。色調は赤褐色で、焼成は普通である。胎土に石英砂を含む。306～308は壺形土器である。306は胴部で断面三角形の凸帯をめぐらし、キザミを施している。調整は横位の箇ナデである。色調は明褐色で、焼成は良好である。胎土に石英砂を含む。頸部附近で頭部下に三角凸帯をめぐらしキザミを施している。調整は口縁下に強く箇ナデしている。色調は赤褐色で焼成は普通である。胎土に石英砂を含む。308は胴部で、凸帯をめぐらしキザミを施している。調整は横位の箇ナデである。色調は内側が灰色で外側は明褐色である。凸帯下にススが付着している。焼成は普通で、胎土に細やかな砂粒を含む。309は壺形土器の胴部で、縦位に荒く条痕を施している。色調は明褐色である。焼成は良好で、胎土に石英砂を含む。310は壺形土器の脚台である。しっかりした作りで、器面は縦位の箇調整である。色調は明褐色で、焼成は良好である。胎土に砂粒を含む。

弥生土器 第38図（311～314） 第40図（352～358）

311～330は壺形土器の口縁部である。311～313は口縁部がやや外反し、口縁端部の外側にキザミを施している。調整は横位の箇調整である。色調は明褐色で、焼成は普通である。352～357は壺形土器である。352は頭部がゆるやかにしまるもので、やや胴長の壺形土器である。器面は箇磨きされている。色調は赤褐色で、焼成は普通である。353は頭部附近に浅い沈線を施している。色調は黄褐色で、焼成は普通である。354は胴部である。頭部下の部分に沈線の文様がみられる2本の沈線で区画するようにし、その上に弧状の沈線を施している。色調は褐色で、焼成は普通である。355は頭部である。頭部下に横位に一本の沈線をめぐらし、その下に斜位の沈線を施している。胴部にかけては大きく張り出す器形である。調整はていねいな箇磨きで、色調は灰褐色である。焼成は良好で、胎土に細い砂粒を含む。

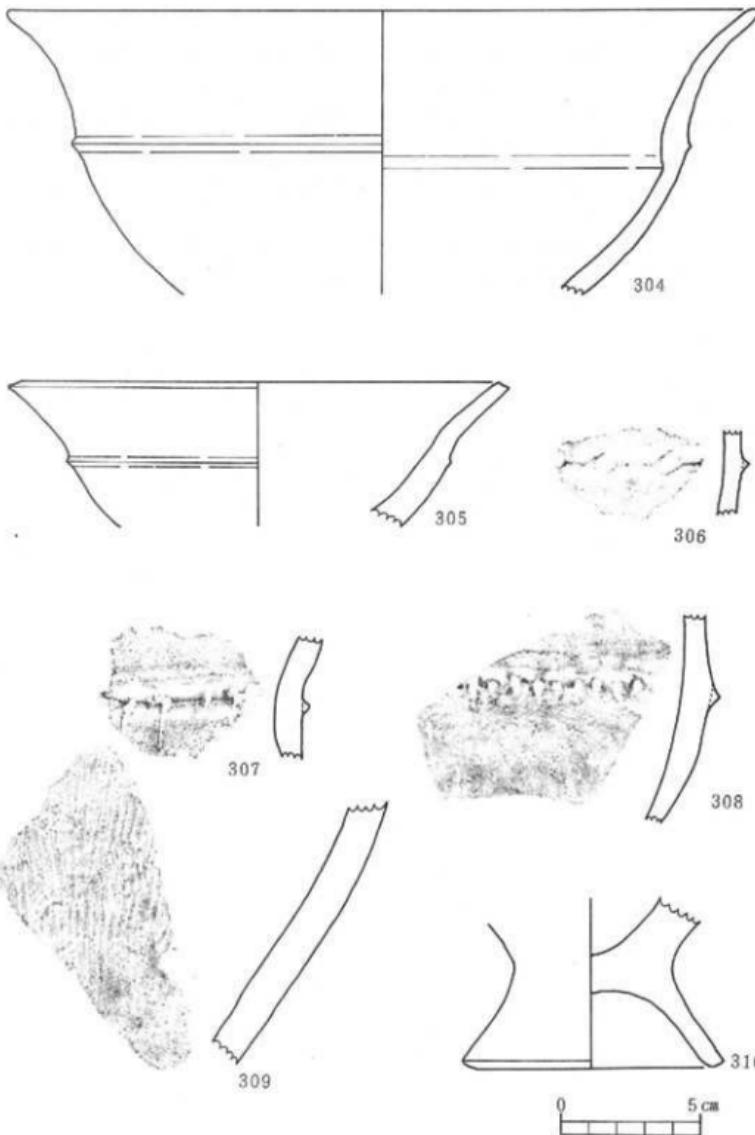
356は底部が上げ底状をなす。色調は黄褐色で、焼成は普通である。胎土に石英砂を含む。357は平底である。色調は赤褐色で、焼成は普通である。胎土に砂粒を含む。358は高环である。脚台上部に凸帯をめぐらす。坏部は平面をなして、ゆるやかに口縁端部へと開く。調整は籠磨きで、色調は赤褐色である。焼成は普通で、胎土に石英砂を含む。

掲文土器 第38、39図(314～349) 第40図(350～351)

314～327は口縁部が肩部より逆「く」の字状に内彎するか、やや直線的に内彎するかたちをとる。口縁端部外側か、その直下に粘土帯を施し凸帯をつくり、押捺キザミを施している。318・322は口縁下にも同様に施している。器面は横位の籠調整である。色調は褐色で焼成は普通である。胎土に石英砂を含む。328はやや開く口縁部で、口縁端部外側に凸帯をめぐらしキザミを施している。329は外反し、口縁端部に凸帯をめぐらしキザミを施している。また、凸帯下には直径0.3cmほどの有孔をおこなっている。330はやや内彎する口縁部で、口縁端部は平坦面をなし、その外側に凸帯をしきザミを施している。器面は横位の籠調整である。色調は褐色で、焼成は普通である。332・334は肩部が逆「く」の字状に屈折しており、331・333・335はほぼ直線的である。肩部には凸帯を施しキザミを入れてある。334は幅の広い押捺キザミである。色調は333以外は褐色である。焼成は普通で、胎土に石英砂を含む。336は器面に凸帯をコーン状に貼付けている。調整は籠で施している。色調は明褐色で、焼成は普通である。胎土に細い砂粒を含む。337・338は壺形土器である。胸部から口縁部にかけ直線的になす器形で口縁部下に凸帯をめぐらし、337はキザミを施している。器面は籠ナデ調整である。色調は褐色で、焼成は普通である。339は肩部がやや屈折する深鉢形土器の口縁部である。口縁端部下の外側に凸帯をめぐらし、籠でその凸帯を区画するように沈線を施している。調整は籠磨き調整である。色調は褐色で、焼成は良好である。胎土に細い砂粒を含む。340は鉢形土器の口縁部である。口縁端部は平坦面をなし、その下に2本の沈線を施している。器面は籠調整である。色調は褐色で、焼成は普通である。341は鉢形土器の口縁部である。文様帶のつけ方は、339と同様である。342～345は鉢形土器と思われる。342は口縁部がやや外反し、口縁端部下の外側と口縁下部に凸帯をめぐらし、凸帯に沿って沈線を施している。調整は籠ナデで、色調は明黄色である。焼成は良好で、胎土に砂粒を含む。343は口縁部下の外側に凸帯を施して調整は横位の籠調整である。色調は黒褐色で、焼成は普通である。344は口縁端部が波状をなし、その凸部に押捺キザミを施している。口縁端部下の外側と口縁下部に凸帯をめぐらしている。色調は明褐色で、焼成は普通である。345は口縁端部が波状をなし、キザミを施している。箱形に凸帯を施して、それにそって沈線を施している。調整は籠調整である。色調は明褐色で焼成は普通である。346は浅鉢形土器で、口縁部の直径が2.4.6cmである。胸部が球形になり、口縁部がやや外反する。口縁部の内側は段をもち調整は横位の籠調整をおこなっている。胸部下に浅い沈線を施している。色調は褐色で、焼成は良好である。胎土に細い砂粒を含む。347は浅鉢形土器

である。口縁部が外反し、肩部で屈折して、胴部に移行する。口縁端部はほぼ平坦面をなす。調整は籠磨きである。色調は灰褐色で、焼成は良好である。胎土に石英砂を含む。348は小型の鉢形土器と思われる。口縁部が内彎して、口縁端部で若干外反する器形をなす。口縁端部外側に薄く凸帯をめぐらす。調整は籠磨きである。色調は黒褐色で、焼成は普通である。胎土に細い砂粒を含む。349は鉢形土器の底部である。円盤貼り付けの技法をとっている。底は平底を呈している。調整はていねいな籠調整である。色調は灰褐色で、焼成は良好である。胎土に細い砂粒を含む。

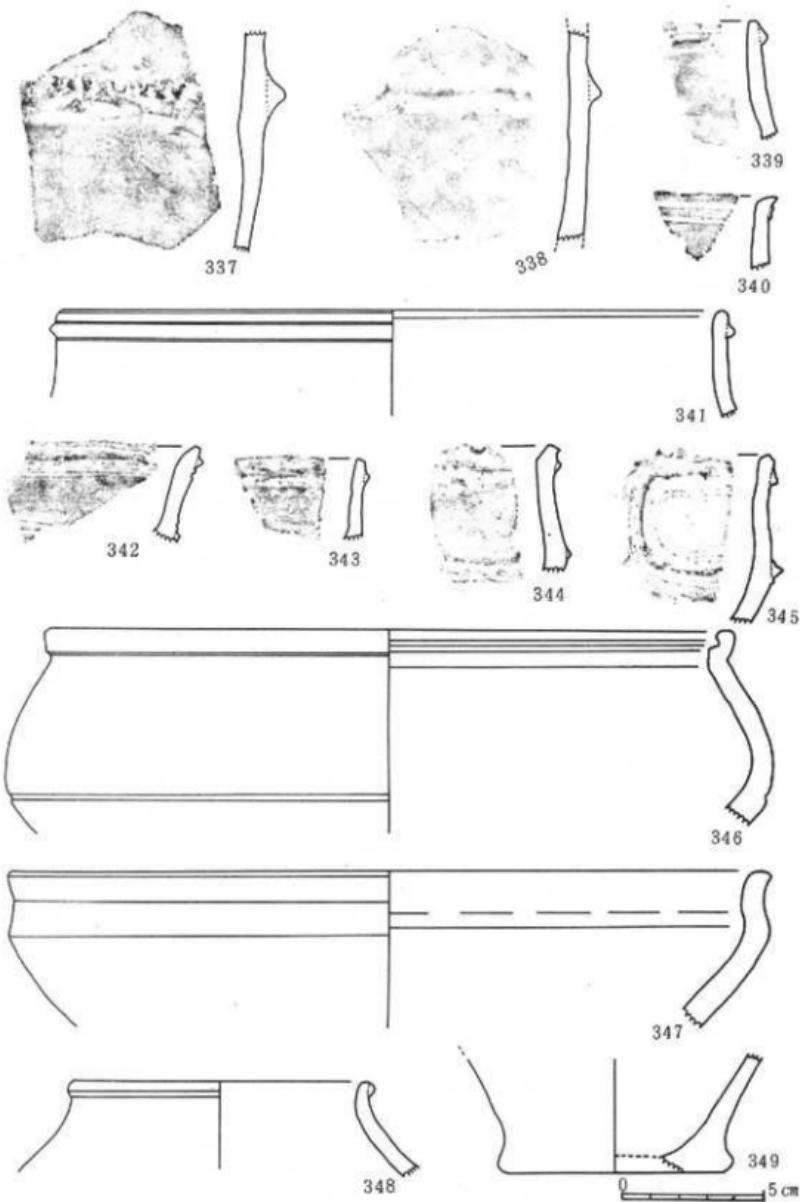
350・351は變形土器の底部である。胴部に向って開く器形である。底は平底を呈する。調整は籠でなされ、色調は褐色である。焼成はよくない。胎土に石英砂を含む。



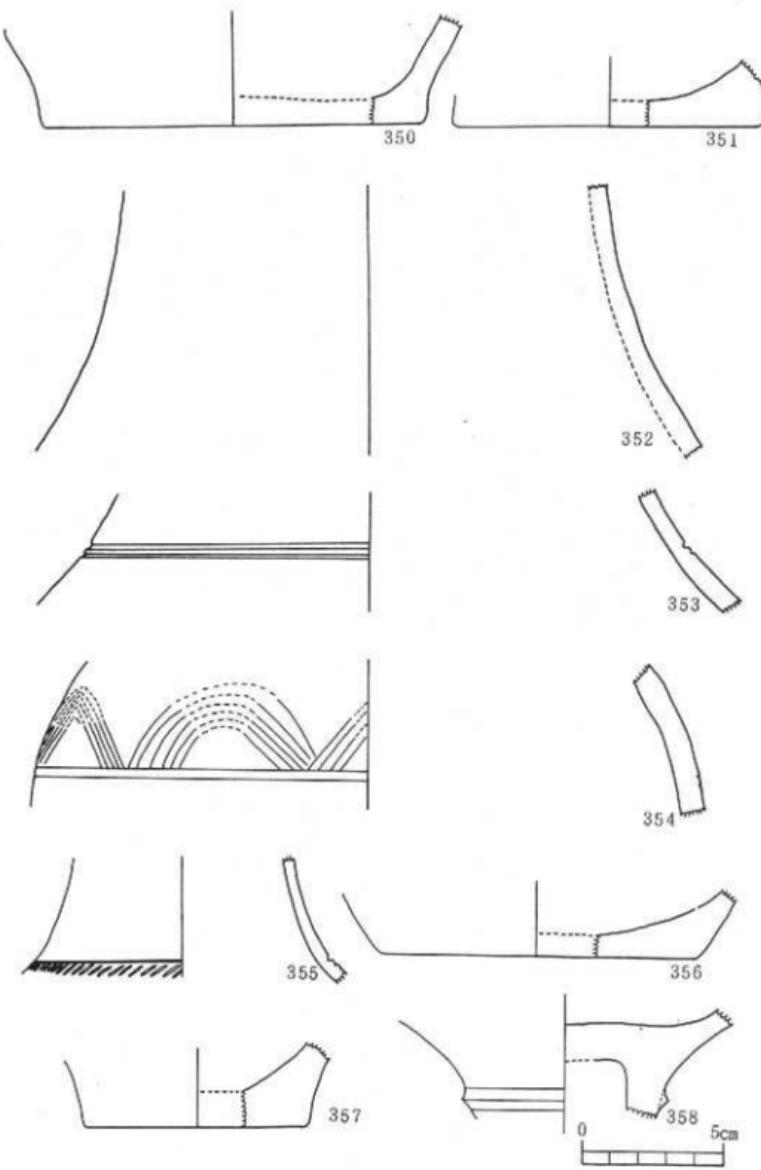
第37図 第35トレンチの出土遺物①



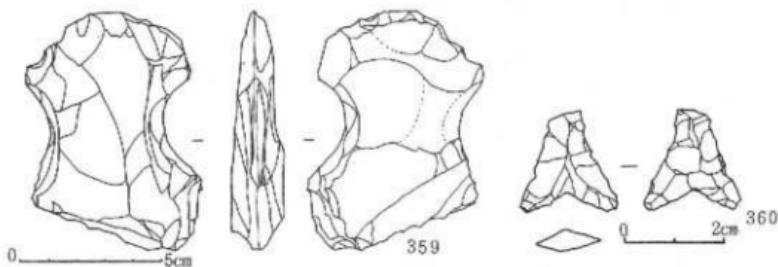
第38図 第35トレンチの出土遺物②



第39図 第35トレンチの出土遺物③



第40図 第35トレンチの出土遺物④



第41図 第35トレンチの出土遺物⑤

石器 第41図（359～360）

359は両側に抉りを施した打製石斧である。先端部が欠損している。抉り部の加工がていねいである。石材は玄武岩質である。360は玄武岩質を素材としたもので、二等辺三角形を呈する石鏃である。先端部が欠損している。

第IV章 まとめ

発掘調査地点設定の基本として4m×4mのトレンチを35ヶ所設定した。そのうち30ヶ所の調査を行ない遺跡の確認を行なった。

この地域は火山灰が厚く堆積しているため5mの深さまで掘り下げたトレンチが5・6ヶ所みられた。特に池田火山噴出物は厚く1.5m～2m位が普通であったが西原迫地区はそれ以上で次の層まで達しえなかつた。

遺物は開闢岳噴出物を母体とした腐植土層、池田火山噴出物を母体とした腐植土層、桜島噴出物を母体とした腐植土層中にみられた。またこの調査では遺構の検出はなかった。

遺跡としては3ヶ所確認されそれぞれ小字名をとり「西原道畠遺跡」「西原迫遺跡」「早馬迫遺跡」と名称をつけた。

西原道畠遺跡

この遺跡は1・2・3トレンチを含む字「西原道畠」と字「早馬迫」にまたがる標高33mから43mの南面した舌状台地である。第1・3トレンチでは塞ノ神A式土器が出土し第2トレンチでは成川式土器が出土している。
註2

塞ノ神A式土器は河口直徳氏が分類しているAa (038・039・040・041・
註3
042・048・049・050・051・052) Ab (001・002・043・044
045・046・047) の2類が出土している。口縁部では沈線が直線的であるもの (014
015・016・017・018・019・020・021・022・023・024・
025・026) と曲線的であるもの (027・028・029・030) とがある。また直線的か曲線的かわからないが連点があるもの (035・036・037) と無文 (053) とがみられる。

器形も円筒形の胴部から口縁部が外反する塞ノ神A式の壺形で円筒土器の類である。底部 (033・054) は平底を呈するものと思われる。

以上の様に本遺跡は上層に古墳時代の成川式土器を出土し、下層に縄文早期後葉の塞ノ神A式土器を出土する遺跡である。

西原迫遺跡

この遺跡は第6・7・8・35トレンチを含む字「西原迫」にあり標高42m～45mの台形で中に小谷が中央に走っている。遺跡の中心は小谷の南側にあるが北側にも少量みられた。また第8トレンチより西南部は池田火碎流が表面に露出していくと第9トレンチでは表土直下池田火碎流にあたつた。

遺物は古墳時代の成川式土器と弥生土器と縄文土器が出土している。成川式土器は、 (068～072, 141～144, 304～310) 壺形土器、高杯、罐等が出土している。弥生土器は前期で板付I・II・IIIがみられる。板付I式土器は074・311・312・313
註4

の壺形土器である。如意形口縁をもち刻目を施している。壺形土器としては 078・354 がみられる。板付Ⅱ式土器は壺形土器の 073 をはじめ 080・081・082・152・358 の高环や 353・355 の壺形土器がみられる。板付Ⅲ式土器としては 145・146・147 の壺形土器がみられる。075・076・079 はこの時期の壺形土器で南九州の特殊性と思われる。第 6 トレンチの壺形土器はこの時期とその後の中期初頭（065～067）にあたる土器と思われる。なお第 5 トレンチの 059 も同じ頃と思われる。

縄文土器の 5 層の土器は晩期Ⅲ式 b にあたる時期で夜臼式タイプと思われる。壺形土器^{註 5}（087～105, 107～111, 156～189, 314～338）と壺形土器^{註 6}（077, 202, 207）と鉢形土器（106, 112～114, 190～201, 210～220, 339～348）等が出土している。

壺形土器は口縁部と肩部に刻目突帯をもち器面は範調整が主体である。口縁部の突帯は板付遺跡で分けられた A, B, C の 3 つのタイプともあり、刻目も指圧痕と範状痕がある。口縁部^{註 7}内傾・直立・外傾があり、突帯とともにバラエティーに富む。これらのバリエーションとしては、104, 105, 338 のような刻目のないものと 102, 103 の突帯をつけずに肩部の角に刻目だけを施しているものもある。

壺形土器は口縁部と頸部と底部である。全体的に胎土焼成は良く、暗茶褐色を呈する。

鉢形土器には浅鉢と深鉢がある。全体的に研磨されており薄手で暗褐色を呈する。深鉢は 106・199・339・341・343・344・345 である。他は浅鉢と思われる。口唇直下に突帯をもち研磨され口縁部が直立しない内傾する。浅鉢は 190・191・193・195・197・198・342 は口唇部直面に突帯がみられ内傾と外傾がある。192・196・200・347 は口縁部が外反する浅鉢である。346 は口縁部が立ち上がる黒色研磨土器であり晩期Ⅱ式を踏襲しているものと思われる。

他に組織痕土器（112・113・210～220）がある。これらは土器片が小さいので^{註 8}器形は、はっきりしない。全体的に底部近くであると思われる。組織痕はすべて鷺目压痕文である。

石器としては扁平打製石斧で両抉り込みのあるものとないものとが出土している。

早馬追遺跡

この遺跡は第 23 トレンチを中心とし、字「早馬追」と字「西原」にわたる標高 46m～55m の南に傾斜する台地である。22 トレンチでは遺物が磨耗して出土しているのでこの附近から流れた遺物と思われる。

遺物は弥生時代のみが出土している。時期として前期後葉の亀ノ甲タイプから中期中葉の入来Ⅲ類タイプまでみられる。

^{註 9}

I 類は 234～240, 244～254, 275～281 である。三角断面突帯に刻目を施す亀ノ甲タイプと思われる。II 類は 255・256・258・259・261・263・264・268・272～274, 276～280 である。壺形土器は突帯に刻目がなく I 類

と同形をしている。壺形土器は突帯をもっている。時期的にはⅠ類に近いと思われる。Ⅲ類は241～243、265～267、269・270・271で口縁部の端が角張り溝もみられる土器で突帯には刻みがない。また肩部の突帯は2本のものもみられる。これは中期中葉に位置すると思われる。

石器としては大形石器である298は片刃をもつ鎌と思われる。中形石器は若干の磨耗がみられる。

引用文献

- | | | |
|------------|----------|----------------------------|
| 註1 塞ノ神式土器 | 河口貞徳 | 鹿児島考古6号 |
| 2 成川遺跡 | 文化庁 | 埋蔵文化財報告書・第七 1973 |
| 3 1に同じ | | |
| 4 板付 | 福岡市教育委員会 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集
1976 |
| 5 繩文時代のカメ棺 | 賀川光夫 | 考古学論叢2 1974 |
| 6 夜臼遺跡 | 森貞次郎 | 日本農耕文化の生成 日本考古学協会
昭和36年 |
| 7 板付遺跡 | 森貞次郎・岡崎敬 | 日本農耕文化の生成 日本考古学協会
昭和36年 |
| 8 原生期の織布 | 籐山猛 | 九州考古学論叢 昭和47年 |
| 9 入来遺跡 | 河口貞徳 | 鹿児島考古11号 鹿児島県考古学会
昭和51年 |

指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書 (4)

鳥山調査区

発行日 昭和55年3月

発 行 指宿市教育委員会

指宿市十町2424

印刷所 朝日印刷

住 所 鹿児島市下荒田四丁目26-13

図 版



鳥山調査区西侧 南西より



調査風景（第23トレンチ）



第 7 トレンチ 西側断面



第 10 トレンチ 北側断面

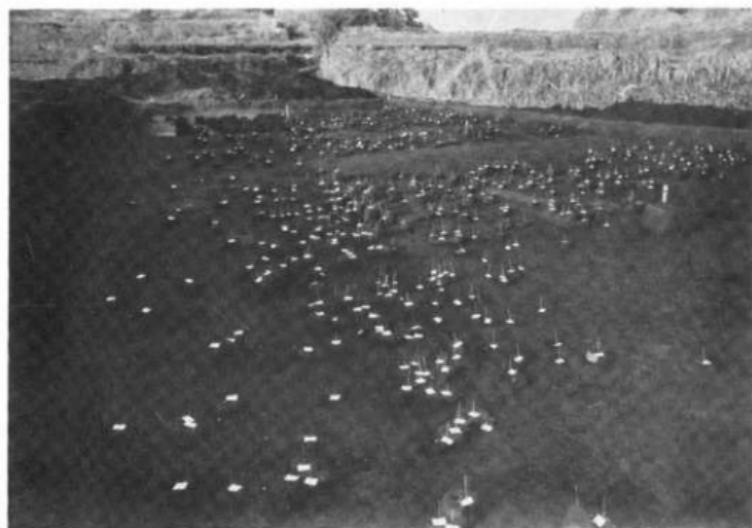


第 3 トレンチ出土状況（西原道畠遺跡）



第 8 トレンチ出土状況（西原追遺跡）

図版 4



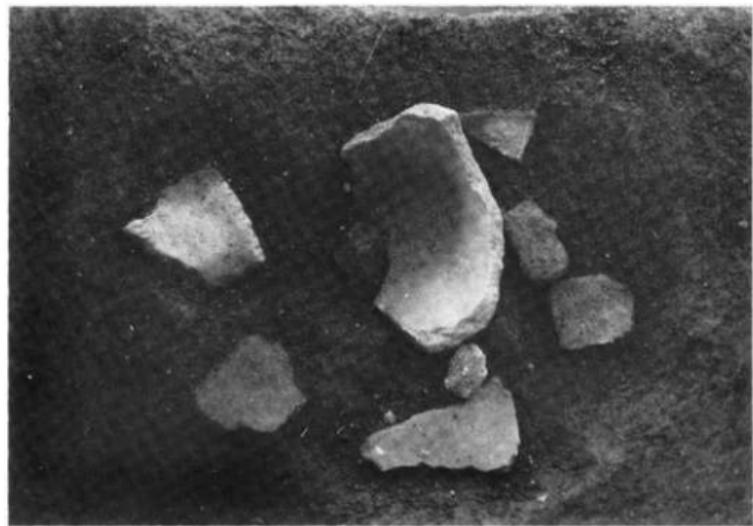
第23 トレンチ出土状況（早馬迫遺跡）



第3 トレンチ出土状況（西原道畠遺跡）



第 7 トレンチ出土状況（西原迫遺跡）



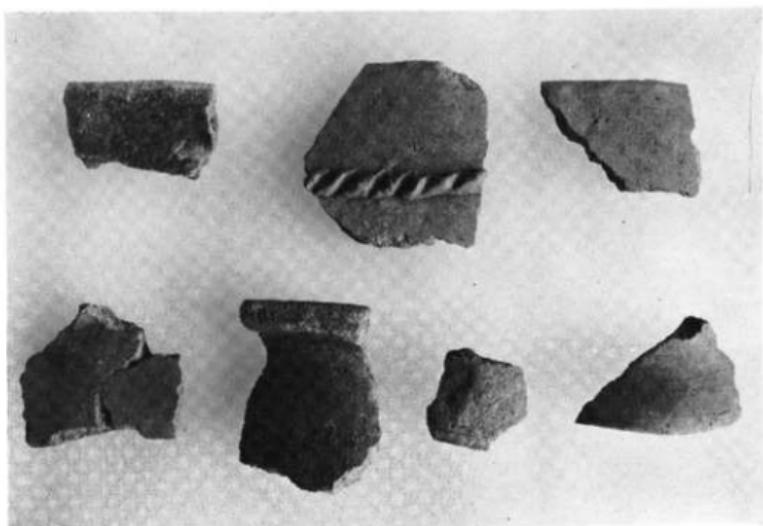
第 8 トレンチ出土状況（西原迫遺跡）



第 8 トレンチ出土状況（西原迫遺跡）



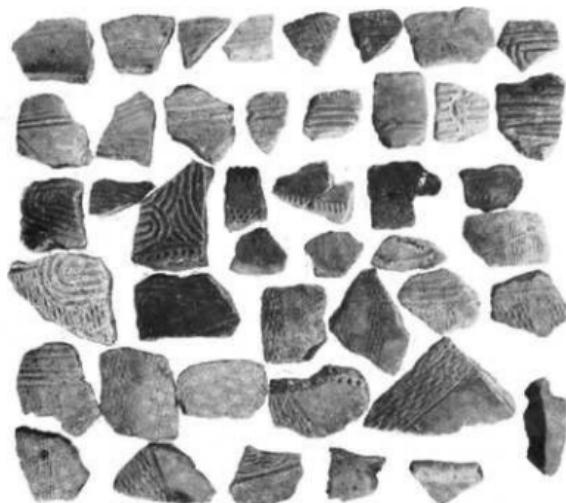
第 8 トレンチ出土状況（西原迫遺跡）



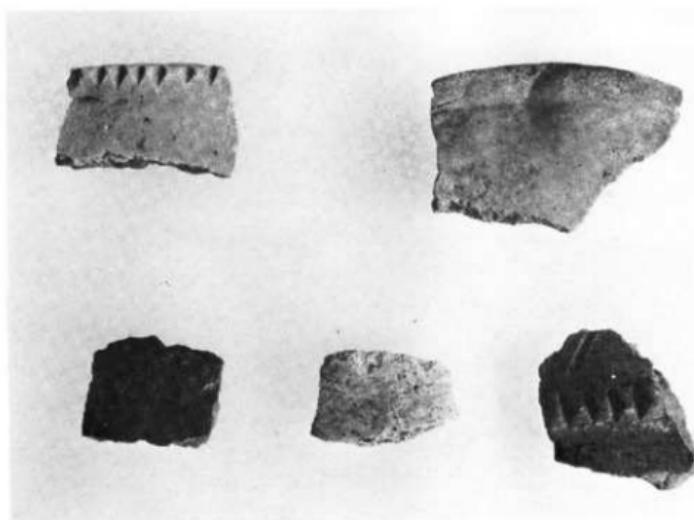
第2 トレンチ出土遺物



第2 トレンチ出土遺物

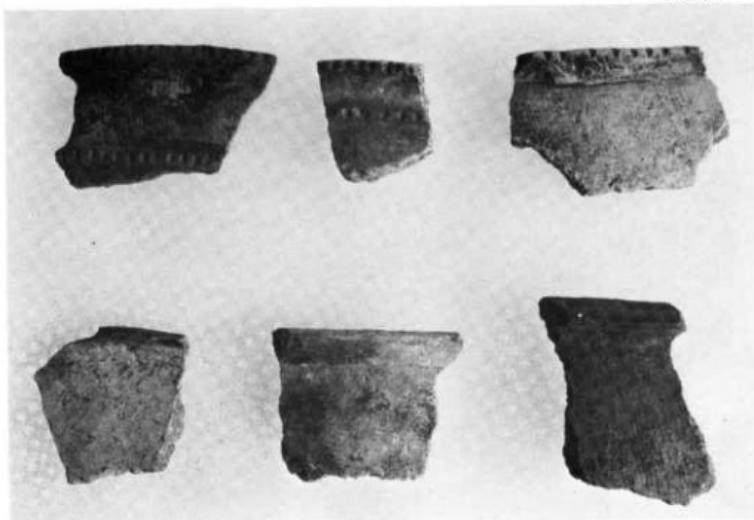


第 3 トレンチ出土遺物

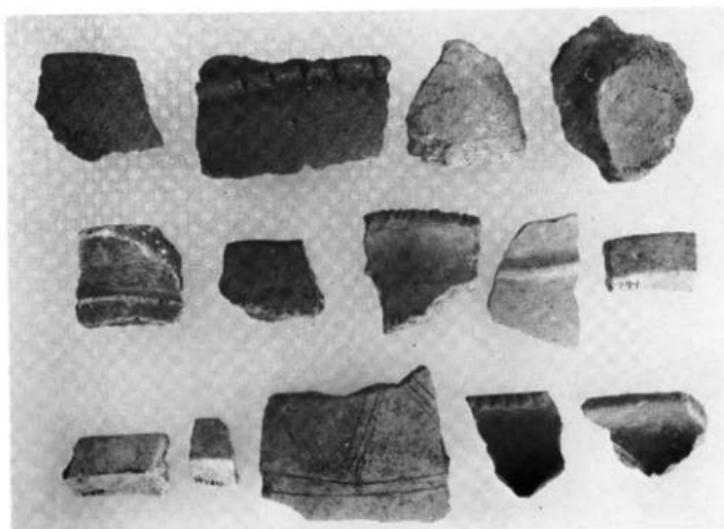


第 5 トレンチ出土遺物

図版 9



第 6 トレンチ出土遺物

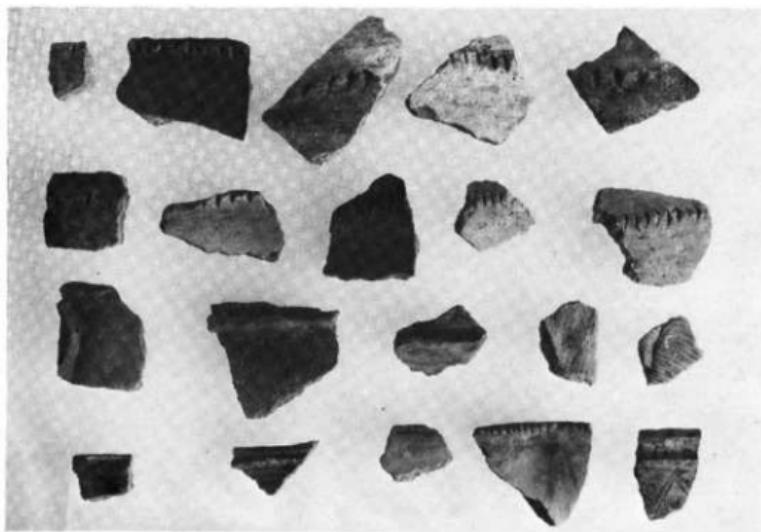


第 7 トレンチ出土遺物

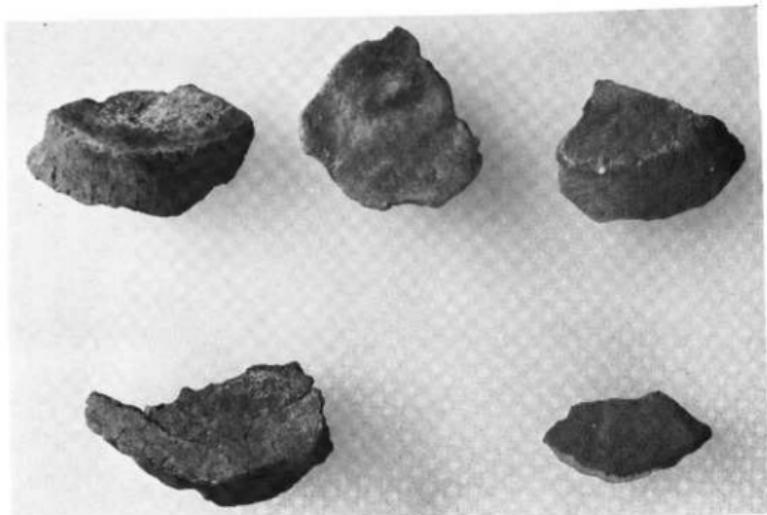
図版 10



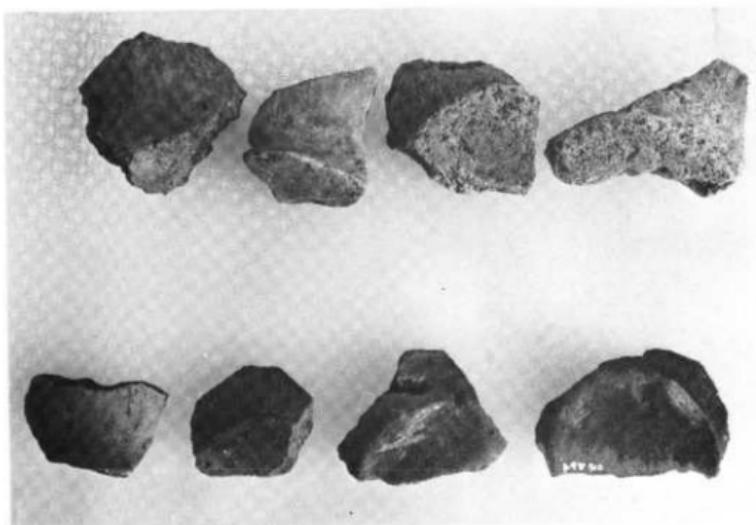
第 7 トレンチ 出土 遺物



第 7 トレンチ 出土 遺物



第7トレンチ出土遺物



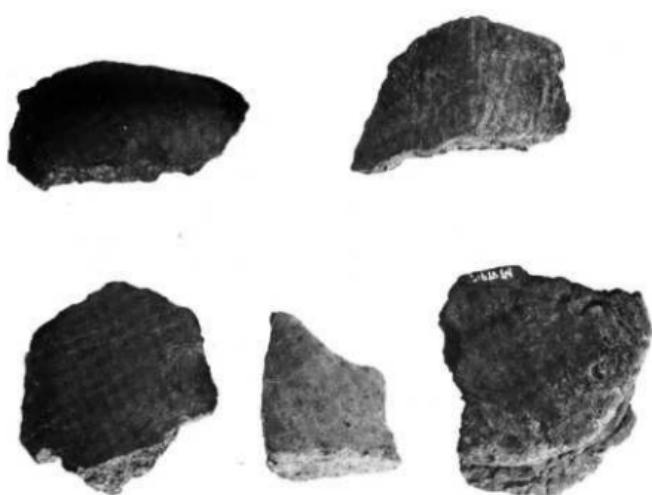
第7トレンチ出土遺物



第7トレンチ出土遺物



第7トレンチ出土遺物



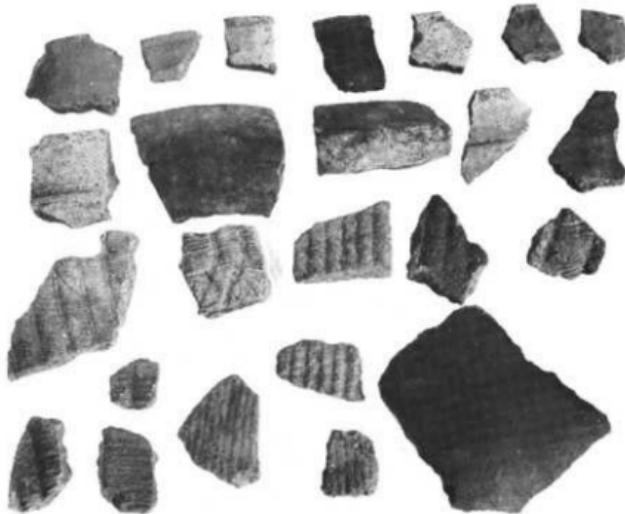
第7トレンチ出土遺物



第8トレンチ出土遺物



第8 トレンチ出土遺物



第8 トレンチ出土遺物



第8トレンチ出土遺物



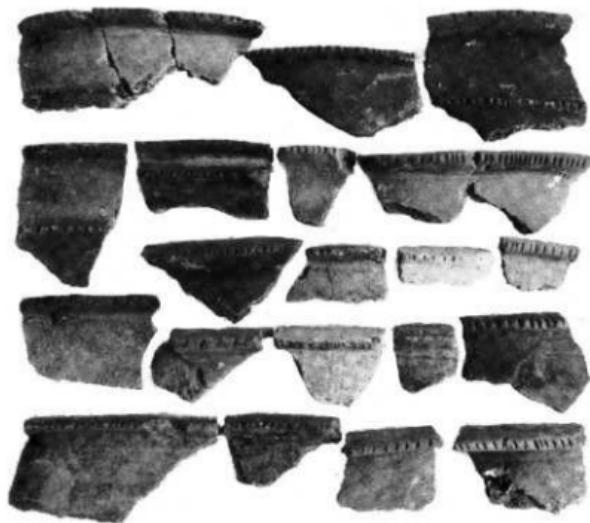
第8トレンチ出土遺物



第8トレンチ出土遺物



第16トレンチ出土遺物



第23 トレンチ出土遺物



第23 トレンチ出土遺物



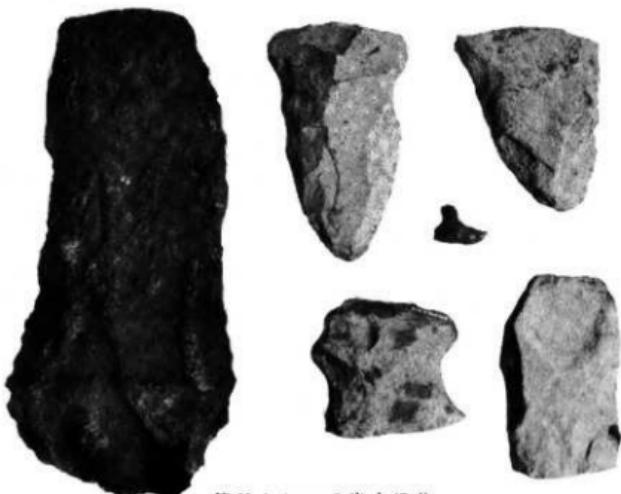
第23 トレンチ出土遺物



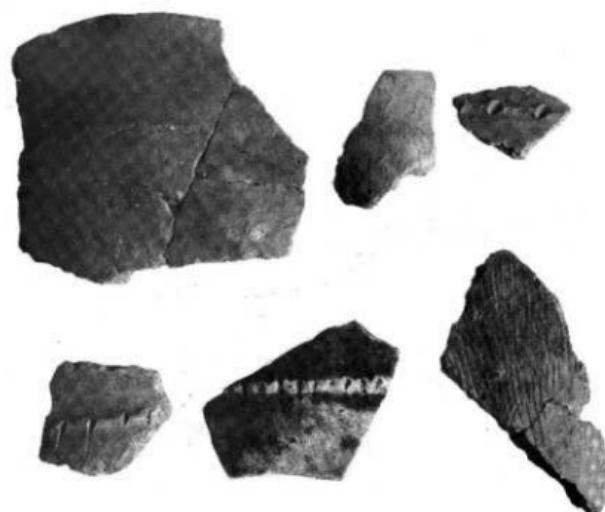
第23 トレンチ出土遺物



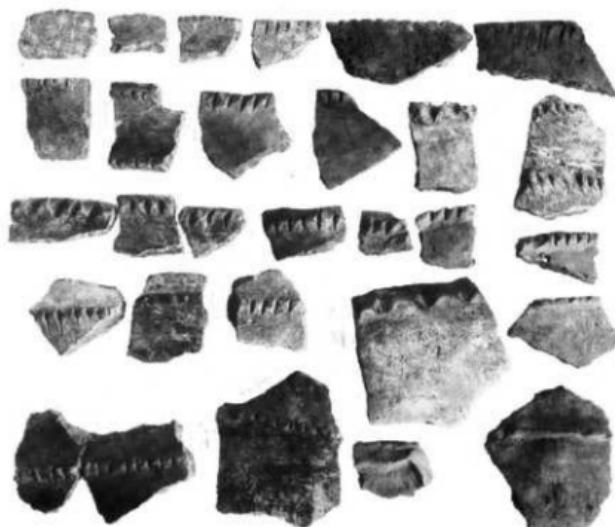
第23 トレンチ出土遺物



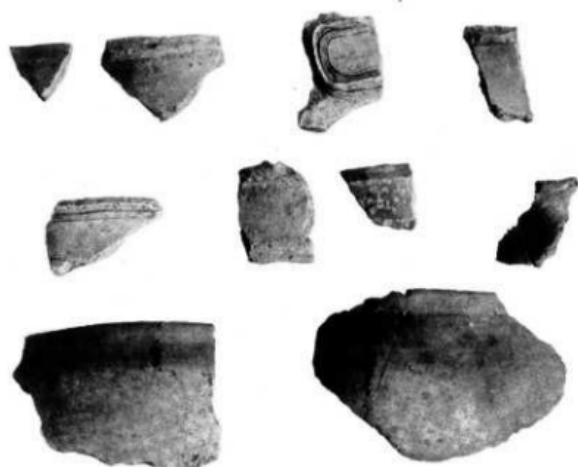
第23 トレンチ出土遺物



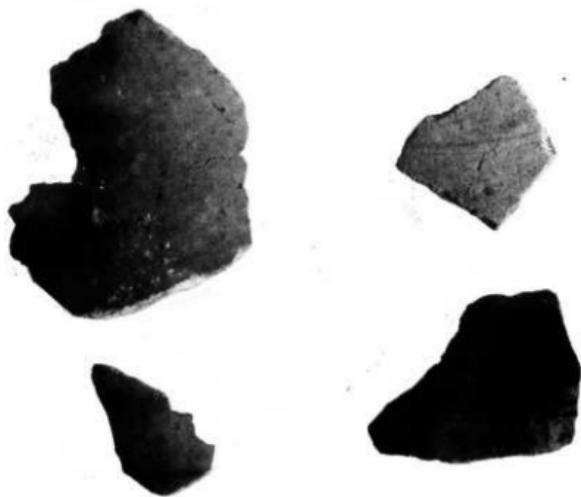
第35 トレンチ出土遺物



第35 トレンチ出土遺物



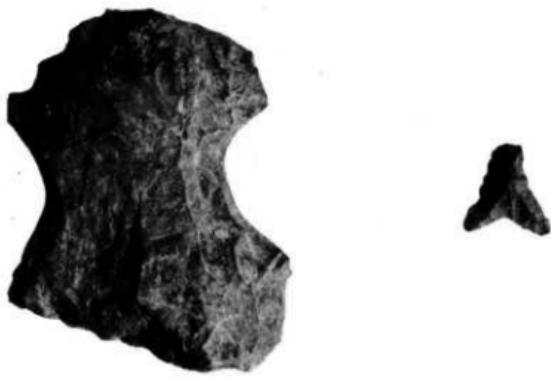
第35 トレンチ出土遺物



第35 トレンチ出土遺物



第35 トレンチ出土遺物



第35 トレンチ出土遺物



